

ト存候。

現今東宮御殿ノ腐敗ヲ來シ、一種異様ノ現象ヲ呈スルニ至リタル原因ハ、此職制（即チ武官長、侍從長ノ制度）ノ罪最モ其多キニ居ルト言ハザルベカラズ。何トナレバ武官長ハ從來御殿ノ慣例ヲ熟知セズ。又殿下ノ御性質等ヲモ詳悉セズシテ諸事ヲ號令斷行シ、又侍從長往々意見ヲ異ニスル等ノコトアルヨリ、部下ノ侍從武官皆之ニ心服セズ、御殿内協和ノ精心ヲ缺キテ一種不可言奇態ヲ呈シ、其結果ヤ恐レ乍ラ殿下ヲシテ亦奇異ノ御感想ヲ惹起セシメ奉ルニ至レリ。奚ゾ慨嘆ニ堪ヘン。

現今ノ制度（即チ武官長、侍從長制度）ノ弊害アルコトハ前述セシ所ヲ以テ略ボ盡セリト雖モ、此制度ノ間接ニ殿下ノ御體育及ビ御思想ノ進歩ノ上ニ及ボセル影響如何亦考察セザルベカラズ。第一御體育ノ上ニ及ボセル影響如何ヲ考フルニ、前來詳陳セシ如ク、武官長ノ思慮ナキ號令的ノ處置ハ御殿内上下ノ協和ヲ破リ、又武官長、侍從長兩立意見ノ衝突ヲ來ス等ノ結果ハ、殿下ヲシテ窃カニ御殿内ノ模様何トナク奇異ナル様子ヲ御覺ラシメ申シ、隨テ不愉快ナル御感想ヲ生ゼシメ奉リタルハ明カナル事實ニシテ、神經過敏ノ殿下ヲシテ益々其ノ御神心ヲ惱マサシメ奉リ、實ニ恐レ入りタル次第ナリ。先頃來ノ御長病中御氣先キ常ニ御變リナク御宜シカリシト雖モ、時々御沈鬱ノ御様子ヲ伺フコト屢々コレアリ、御病中此ノ如ク時々御沈鬱且ツ御思

案遊バサル、コト他ニ其原因モアルベケレドモ、上記セル御殿内ノ模様ヲ御懸念遊バサル、コト亦其一因ト推シ奉ラザルヲ得ズ。

次ニ此制度ノ間接ニ御思想ノ進歩ノ上ニ及ボセル影響如何ヲ察スルニ、此制度ノ爲メ御思想ノ錯亂ヲ來スノ恐レアリ。何ントナレバ武官長、侍從長兩立ノ姿ナルヲ以テ、兩人ノ言フ所、行フ所、隨テ同ジカラザルコトアル時ハ、殿下ヲシテ其御採擇ニ迷ハシメ奉リ、其結果御思想ノ錯亂ヲ生ゼシムル害アリ。故ニ御教育主任者ハ如何ナル點ヨリ觀察スルモ唯ダ一人タラザルベカラズ。

今日ノ東宮殿下ハ昔日ノ東宮殿下ニ非ラズ、元來東宮殿下ハ他ノ御學問上ノ智識、即チ科學的智識ノ御進歩ノ割合ニハ、世態人事ノ御觀察力非常ニ鋭ク、又大體ノ推想力ニモ富マセラルルナリ。此點ヨリ申セバ他ノ十六七歳ノ兒童ノ遠ク及バザル所ナリ。其故ハ御幼年ヨリ他人ノ手ニ御成長被遊、御教養ノ主任者屢々交迭、又近侍ノ人時々變更セル等ヨリ、所謂^{マ、フヤ}繼親育チノ兒童ノ如キ有様アリ。元來神經御敏捷ノ質ナル上、右ノ如キ御成育ノ有様ナルヲ以テ益々之ヲ鋭敏ナラシメ、隨テ御推想力ヲ増長セシメ、遂ニ人事世態ノ觀察力ニ非常ナル御進歩ヲ見ルニ至レリ。然ルニ常侍ノ諸員之ニ注意セズ、イツ迄モ御幼童視スル時ハ、大ニ御教育ノ錯誤ヲ來スベシ。蓋シ教育ノ適用トハ兒童ノ年齢及ビ知識進歩ノ度ヲ見込、之ヲ遇スルノ法、即チ教育

施行ノ方法ヲ異ニスルノ謂ヒニシテ、兒童十六七歳ノ頃ハ諸種ノ知識湧出、推想力亦最モ強盛ノ時期ナルヲ以テ、教育ノ任ニアルモノ其善事ハ益々伸暢セシメ、又其惡事ハ巧ニ之ヲ防制スルノ道ヲ考ヘザルベカラズ。然ルニ世ノ父兄タル者、動モスレバ其子弟ヲイツ迄モ幼童視シ、自然ニ湧出シ來レル知識ヲ制止セントテ唯ダ濫リニ叱責ヲノミ事トシ、其結果兒童ノ身體、知識ノ發達ヲ沮喪セシムルニ至ル、戒メザルベカラザルコトナリ。況ンヤ殿下ノ如キ神經御銳敏ノ御方ニハ、最モ此ノ點ニ注意シ、教育ノ適用ヲ誤ラザル様心懸クルコト肝要ナリ。

余ハ常ニ常侍諸官ノ教育上ノ思想ヲ有セザルベカラザルコトヲ言ヘリ。尤モ完全ナル教育思想ハ教育學者ニ非ザレバ望ムベカラザルコトナリト雖モ、常侍諸官ハ少ナクモ殿下ノ御性質、御體質、又ハ御長所、御短所等ヲ能ク知悉シテ、御長所ハ益々伸暢セシメ、又御短所ハ殿下ノ御特質及ビ御體質等ヲ十分ニ考究ノ上、徐々ト圓滑ニ之ヲ補足シ奉ルノ進路ヲ取ラザルベカラズ。且ツ殿下ニ接シ奉ルコト殿ニ過ギ、又ハ寬ニ流ルベカラズ。嚴ニ過グル時ハ其人ヲ御忌憚被遊、遂ニ何事モ隨意ニ御話シ遊バサレザルコトナリ、又寬ニ過グル時ハ之ヲ侮慢遊バス傾キヲ生ズ。故ニ其要ハ寬嚴其中ヲ得テ、殿下ヲ御愛シ申上ゲ、又殿下ヨリ御愛ヲ受ケテ始メテ御信用ヲ得ベキナリ。此ノ如ク御信用ヲ得タル以上ハ、殿下モ御伏藏ナク又御忌憚ナク御思召ヲ御話シ被遊、又申上ル者ノ意見ヲモ善ク御聽取シ遊バスナリ。然ルニ若シ御信用ナキ者ノ申上

ル時ハ、表面ニハ御聽納レ遊バス如キ風アルモ、内實御心服遊バサレザルナリ。又申上グルニモ自カラ其法アリテ、殿下御特質ヲ知り又御愛憎ノ傾ク所ヲ見、徐ロニ又巧ミニ申上ゲザレバ、當ニ御得心遊バサレザルノミナラズ、却テ御疇ヲ高メ其目的ヲ達セザルコトアリ。(前項教育ノ適用云々ノ處ヲ參照セヨ)。常侍ノ諸官右等ノ點ニ注意セズシテ、唯々殿下ノ御爲メト思ヒ諫爭スルコトアルモ、當ニ其目的ヲ達スル能ハザルノミナラズ、遂ニ其人ヲ嫌惡遊バサルノ結果ヲ生ズルニ至ルベシ。余ノ常ニ常侍ノ諸官ニ教育上ノ思想ヲ有スルヲ望ムハ、上記ノ次第ニテ其梗概ヲ知ルヲ得ベシ。要スルニ現今御教育ノ事タル殿下ノ御性質、御體質、及ビ御偏向等ヲ能ク知悉シテ、而シテ其御信用ヲ得ルニ非ザレバ出來得ベキ事ニ非ザルナリ。況ンヤ今日ノ皇太子ハ昔日ノ皇太子ニ非ラズ、御智識モ進歩、大體ノ事物ノ道理ヲモ能ク御解シ被遊コトナレバ、其御教育ノ責ニ任ズルモノ武事一片ノ武官ヤラ、又宮中ノ禮儀ヲ知レル文官位ノ事ニテハ到底無覺束コトニシテ大ニ其人ヲ要スルナリ。又教育ノ目的タル被教育者ノ自然ノ意志ヲ杆格セラ、所ナク、正當ニ發達セシムルニアリ。(但シ其意志不理ナル時ハ徐々ト氣長ク自然ニ合點ノ行ク様匡正セザルベカラザルコトハ前述ノ通り)。然ルニ被教育者タル殿下ノ一言一行ヲ常侍ノ諸官、教育上ノ思想ナク、濫リニ批評又ハ抑揚スルニ至テハ、殿下モ其煩累ニ堪ヘサセラレザルベシ。是ヲ以テ彼ニ斯ク言フ時ハ、彼レ必ラズ斯ク云ハン、又誰ニ斯ク言フ時ハ其者必ラズ

斯ク云ハントノ如キ御推想力ヲ増進セシメ、徒ラニ近侍者ニ御懸念被遊、所謂自然ノ御意志ノ發達ヲ阻礙シ、之ガ爲メ御心神ヲ惱マシメ奉ルニ至ル。常侍ノ諸官、實ニ戒慎セザルベカラザルコトナリ。曩者東宮殿下尙ホ明宮御殿ニ御住居ノ頃ハ、近侍ノ諸員完全ナル教育上ノ思想ヲ有セシト言フニハ非ザレドモ、然モ皆其必要ナルコトヲ知り、常ニ教育書ヲ讀ミ、又ハ教育學者ノ說ヲ聞ク等、着々其考究ニ怠ラザリシナリ。然ルニ現今ニ至リテハ其精心大ニ昔日ニ異ナリ、唯ダ拜謁ノ儀式トカ、君臣ノ禮讓トカ言フガ如キ、將來ノ儀式上ニ關シテ、現今左程必要ナラヌ瑣末ノ談話ノミニテ最モ肝腎必要ナル教育思想ノ研究等ハ殆ンド皆無ノ姿トナリ。實ニ慨嘆ノ至リニ堪ヘズ。夫レ田畑ヲ耕作スル農夫ハ土地ノ性質、肥料ノ適不適、蒔種ノ時期等ノ事ヲ知ラザレバ耕作スル能ハズ、又家屋ヲ建築スル大工ハ其技術ニ通ゼザレバ家屋ヲ建造スルコト能ハズ、コレト同ジク人物ヲ教育成セントスルノ任アルモノ、之ニ要スル技能ナクシテ人ヲ教育シウベキヤ。況ンヤ日本一人ノ御大切ナル皇太子ノ御教育ヲナスニ、一人ノ完全ナル教育學者ナク、又少ナクトモ教育上ノ思想ヲ有スルモノスラ稀レナリト言フニ至テハ豈言語同斷ト言ハザルベケンヤ。

或人曰ク、今日ハ御教育ト言フヨリハ寧ロ御體育ノ方御大切ナラズヤト、余モ尤モ同感ニシテ、今日ハ御體育最モ御大切ノ時期ナリ。是レ余ノ御教育ノ任ニアル者、教育上ノ思想ナカラ

ザルベカラズト言フ所以ナリ。抑モ現今普通ノ教育ト言ヘル意味ハ其中ニ養育、即チ體育モ含ミ居リ、其人ノ體力ヲ基礎トシ、之ニ相應スル訓練ヲナスノ謂ヒナリ。世人動モスレバ此教育ト言フ意味ヲ誤解シ、教育トハ教場ニ於テ讀書、算術等ヲ教ユルコトノミノ如ク思惟スルモノアリ、大ナル誤リナリ。讀書、算術固ヨリ教育ノ一部分ニ相違ナケレドモ、唯ダ書物ノ讀ミ方物ノ數ヘ方等ヲ教ユル末枝ニ過ギズ。真正ナル教育ノ主眼ハ唯ダ夫レ善良ナル人物ヲ養成スルニアリ、善良ナル人物ヲ養成スルニハ、則チ家庭ノ薰陶、良友ノ交際、事物ノ觀察等ニ據テ得ラレ、而シテ此薰陶ノ方法ハ前來詳述セシ如ク、所謂教育上ノ思想ヲ要スルコトニシテ、其人ノ體質、性質等ヲ詳査シタル上、高尚ナル思想、善良ナル言行ヲ啓發セシムルニアリ。而シテ之ヲ啓發スルノ法、其人ノ愛憎ノ傾ク所ヲ觀、又其長所、短所ヲ察シテ可成其人ノ氣ニ忤ハザル様注意シツツ徐ロト巧ミニ其目的ノ進路ニ誘導スルニアリ。此故ニ真正ノ教育ノコトタル、遊戲ノ中、笑談ノ中、其他一切ノ交際ノ中ニ快活ニ又圓滑ニナシ遂グベキモノニシテ、之ガ爲ニ決シテ被教育者ノ體力又ハ精心ヲ惱マシムベキモノニ非ザルナリ。然レドモ若シ之ニ反シテ被教育者ノ體力精心ヲ惱マシムルガ如キコトアレバ、是レ教育ノ方法ヲ誤レルナリ。何トナレバ前述セシ如ク、教育トハ體力ヲ基礎トシ、之ニ適應セル訓練ヲ與フル義ナレバナリ。上記ノ次第ナルヲ以テ體育ハ教育ノ範圍内ニ屬シ、密着相離ルベカラザルモノナルヲ以テ、若シ教育

ノ思想ナキモノ御教育ノ任ニアル時ハ、其御體育ヲモ誤マル恐レアリ。

又精心ト體軀トノ關係ハ密接相離ルベカラザルモノニシテ、所謂強壯ナル精心ハ強壯ナル體軀ノ中ニ住ムト言ヘル諺ノ如ク、之ヲ反言スレバ、精心ヲ過用シテ疲勞セシムル時ハ、體力亦自カラ衰弱ヲ來スヲ免レズ。特ニ殿下ノ如キ神經御過敏ノ御方ニハ最モ此點ニ注意セザルベカラザルコトナリ。故ニ御教育ノ任ニアル者ハ勿論、又御體育ノ責ヲ負フ侍醫ニ於テモ、深く御體質、御性質、其他平素ノ御慣習ニ注意シ、可成御精心ヲ多ク御用ヒ不被遊様、又御神經ヲ激動セザル様心懸クルコト最モ肝要ナリ。又殿下ニハ神經御過敏ノ作用ニヤ、一種ノ激シ易キ又勢ニ乗ジ易キ御偏向アリ。故ニ平素御運動其他ノ御遊戯ニ於テモ、動モスレバ勢ニ乗ジ御體力以上、即チ過度ニ及ブコトアリ、此ノ如キ事ハ總テ御發病ノ原因ニモナルコトナレバ、常侍ノ者其度ヲ測リ適度ノ處ニテ御止メ申上ゲザルベカラズ。然ルニ殿下ノ御體質、御性質、其他平素ノ御慣習等ヲ知ラザル時ハ、此事ヲナス頗ル難シ。是レ余ノ常侍ノ諸官並ニ侍醫等ハ、殿下ノ御體質、御性質、其他平素ノ御慣習ヲ詳知スルコト最モ必要ナリトスル所以ニシテ、又教育トハ體育ヲ包含シ密着相離ルベカラザルモノナリト言フ所以ナリ。

又童兒十六七歳ノ頃ハ諸事快活ナルコトヲ好ムモノニシテ、特ニ殿下ハ御幼稚ノ時ヨリ諸事簡易活潑ニ御成長被遊タル御慣習アリ。然ルニ儀式トカ禮讓トカラ主トスル時ハ、嘗ニ其事ノ

虚儀ニ渡リ實益ナキノミナラズ、殿下ヲシテ益々御窮屈ヲ感ゼシメ奉リ、自然ニ御發達ナルベキ快活ナル御性質ヲ挫折シ、其極ヤ大ニ御神經ヲ痛マシムル恐レアリ、豈戒心セザルベケンヤ。

以上縷述スル所ヲ以テスレバ、東宮御殿ノ現今ノ腐敗ヲ起セル大原因ハ、制度ノ宜シカラザルコトナリ。之ニ次グ大闕點ハ常侍ノ諸官、教育上ノ思想ニ乏シキコト是レナリ。而シテ之ニ次グ尙ホ一ツノ闕點アリ、則チ情育ノ御缺乏是レナリ。抑モ東宮殿下御幼少ヨリ兩陛下ノ御膝下ニ御成長遊バサレシナレバ、御親子ノ御愛情ヲ知ロシメシ、此ノ如キ情育ノ御缺乏ト申ス程ノコトナカリシナラント雖モ、如何セン御降誕以來、始終他人ノ手ニ御成長、且ツ其他人ト云フ御教養主任者、其他御附ノ人々ヲモ屢々交送スル等ノコトアルヨリ、前述セシガ如ク所謂^{マ、ヲヤ}繼親育チノ御有様トナリ、又現今ノ制度（武官長制度）設立以來ハ唯ダ規律及ビ儀式等ノ事ヲ主トスルヨリ、諸事嚴格窮屈ニ陥リ、人間特ニ幼少ノ時ニ最モ不可缺親愛ナル情育ノ缺乏ヲ見ルニ至レリ。右ノ次第ナルヲ以テ此頼ミ少ナク御思召シツツアル殿下ヲ遇シ奉ルニ情愛ヲ以テスルモノナク、唯ダ嚴格眞面目一片ヲ以テスルヲ以テ、殿下ノ天真爛漫タル自然ノ御意志下ニ通達セザルコトトナレリ。而シテ其結果殿下ノ御思召ス所容易ニ行ハレザルヲ以テ、殿下ヲシテ奇妙ナル狡智ヲ御増長セシメ奉リ、又一方ヨリハ御神經ヲ益々過敏ナラシムルニ至ル。故ニ此情育ノ御缺乏ヲ補ヒ、且ツ御精心ヲ休養緩和セシムル方法ヲ講ズルコト亦實ニ目下ノ急要問

題タリ。之ニ就キ或人説ヲナシテ曰ク、殿下平素嚴猛ナル武官ヤラ若年ノ侍從等ノ男子ノミニ御接シ被遊、晝夜御寛ギ遊バスコトナク、即チ御氣樂ニ心神ヲ御慰メ遊バス時ナキヲ以テ、宜シク従前ノ通り女官ヲ附ケラル、ベシト、余モ頗ル同感ナリ。夫レ人誰カ窮屈ノミニテ世ヲ過スベケンヤ。必ラズ他ニ安樂ニ氣ヲ舒バシ、心神ヲ慰ムル時ナカラザルベカラズ。然ラザレバ之ガ爲メ世間往々病氣ヲ惹起スノ例尠ナシトセズ、況ンヤ十六七歳ノ精心ノ發達未ダ十分ナラズ、且ツ神經敏捷ナル東宮殿下ノ如キニ於カセラレテヤ。奚ゾ御精心ノ御休養ノコトナクシテ可ナランヤ。此ノ故ニ従前ノ如ク女官ヲ置カセラル、コト甚ダ可ナラント思惟ス。尤モ男子ノミニテモ常侍ノ者皆其人ヲ得、所謂教育上ノ思想ヲ有スル者ノミナレバ強ヒテ女官ヲ置カセラレズトモ、御氣樂ニ又御快活ニ御生活遊バサルコト難キニ非ラズト雖モ、如何セン常侍ノ者一同此ノ如キ人ヲ得ルコト頗ル難ク、又男子ニテ如何ニ注意スルモ女子ノ溫和ニ及バザルコトアリ、且ツ殿下近者御多病ナルヲ以テ、平常ノ御様子ヲ詳知セル女官御看護申上グルコト最モ適當ト存候。將又往年御判斷力ノ御幼稚ナリシ頃ハ、女官ノ弊ナキニシモ非ザリシト雖モ、現今ニテハ女子ノ言フ所ハ此ノ如キモノ、又男子ノ爲スベキコトハ此ノ如キ事ト略ボ御判斷力アラセラル、ヲ以テ、女官ヲ附セラル、モ左程ノ弊ナシト存候。仍テ御病氣御快復後ハ晝間ハ御表ニテ男子奉仕シ、夕刻ヨリ奥へ入御、御氣樂ニ遊バサル、コト情育補缺、且ツ御神經ヲ御

靜穩ナラシムルノ一策カト存候。

終リニ臨デ侍醫ノコトヲ記ス亦無用ニ非ザルベシ。侍醫モ常侍官ト同ジク其人多キニ過グベカラズ。多キニ過グル時ハ議論多岐ニ渡リ一致ヲ缺ク、又平素ノ御性質及ビ御體質等ヲ詳知セル者御異例ノ節ハ主任醫タルコト能ハズ、却テ外來ノ者主任醫トナルガ如キコトアリテハ施治上從來ノ御慣習ヲ知ラズ大ニ困難ヲ感ジ不都合ノコトアラン。故ニ今後ハ適當ナル侍醫ヲ附セラレ、之ヲ御平常及ビ御異例ノ節ノ主任醫タラシムルコト最モ肝要ト存候。但シ此ノ御主任醫ハ御平常ノ節ハ日々參候セズトモ、一週兩三回ニテ可ナラン。其他毎夜宿直ノ侍醫ハ従前ノ通りニテ可然存候。

上來記述セル要點ヲ換言スレバ、現今ノ武官長制度ハ獨逸風ノ任損^{シノコト}ニシテ、今日ノ東宮御教育ニ適セザルコト、又純粹ナル武官御教育ノ主任者タル時ハ、諸事號令的ノ腦髓ヨリ出デ上下一致セズ、其弊ヲ御教育ノ上ニ及ボスコト、武官長、侍從長兩立ノ姿アルコトハ東宮御殿ノ腐敗ヲ起セル原因ニシテ、遂ニ其累ヲ御教育ノ上ニ及ボスコト、御教育主任以下常侍諸官教育上ノ思想ニ乏シク、遂ニ御教育ノ方法ヲ誤マリタルコト、今ノ東宮殿下ハ昔日ノ東宮殿下ニ非ラズ、世事ノ觀察並ニ推想力ニ富マセラル、ヲ以テ、近侍ノ諸官之ニ注意セザル時ハ御教育ノ錯誤ヲ來スコト、教育トハ密接相離ルベカラザルモノナルヲ以テ、教育上ノ思想ナキ時ハ亦御體

育ヲモ誤マルニ至ル恐レアリ。儀式、禮讓等ノコトヲ主トスル時ハ、自然ノ御發達力ヲ抑制シ、勇壯活潑ノ御精心ヲ挫折セシメ奉ルコト、其他情育ノ補缺、且ツ殿下御神經過敏ノ質ニアラセラル、ヲ以テ之ヲ御安靜シ奉ル一ノ方法トシテ女官ヲ附セラル、等ノ數項ナリ。

要スルニ從來東宮御教育ノ弊タル其人物宜シキヲ得ザルニ由ルト雖モ、抑モ亦職制其當ヲ得ザルニ坐スルコト最モ多シ。仍テ其弊ヲ破リ適當ナル改正ヲナスコト目下ノ急務ナリトス。若シ然ラザレバ益々東宮御教育ヲ誤マルニ至ルヤ明カナリ。依テ僭越ヲ顧ミズ左ニ東宮職々制改正愚案ヲ認メ供御參考候。

東宮職々制愚案

- 東宮大夫又ハ東宮職長官 一 人
 (親任官又ハ高等官一等トシテ陛下ノ御信用アリ且ツ德望アル者ヲ以テ之ニ任ズ)
- 東宮御教育ノ事ヲ掌リ東宮職々務ヲ總理シ其職員ヲ監督ス。
- 東宮侍補 二 人
 (高等官二等又ハ三等トシ、東宮殿下ノ御性質及ビ御體質ヲ能ク知悉シ、現今ノ教

育上ノ思想ヲ有スル者ヲ以テ之ニ任ズ、其一人ハ武官ヲ以テ之ニ補スルヲ可トス。
 東宮職長官又ハ大夫ヲ輔ケテ東宮御教育ノ事ヲ掌ル。

- 東宮侍從 若干人 奏任官
- 東宮武官 若干人 奏任官
 常侍奉仕ス。
- 東宮主事 一人 奏任官
 東宮職々務ヲ庶理ス。
- 東宮教官 (又ハ東宮御用掛) 若干人 勅奏任官
 東宮御學科ノ教授ヲ掌ル。(但シ内一人ハ教育學專門ノモノタルベシ)。
- 東宮侍醫 若干人 勅奏任官
 東宮ノ診候醫藥衛生ヲ掌ル。

本職制ハ主トシテ東宮殿下御平時ニ適用スベキモノニシテ、今般ノ御大患後兩三年間ハ專ラ御身體ノ御保養ノミノ御主旨ナレバ、差當リ本職制通りノ人員ヲ要セズ、便宜斟酌加減シテ可ナリ。

東宮大夫又ハ東宮職長官ハ文武官ニ限ラズ一人ニシテ御教育ノ全權ヲ有シ、其方針タル從來ノ如ク唯ダ軍規號令又ハ儀式的タルベカラズ。可成簡易ヲ旨トシテ御體力相當ノ御教育ヲ申上グルヲ期シ、又其人トナリヤ進歩的ノ思想ヲ有シテ國家ノ大勢ニ通ジ、瑣々タル小事ニ拘ハラズ大量ノ人物タラザルベカラズ。

東宮侍補ハ二人位ニテ、一人ハ文官、他ノ一人ハ武官ナレバ最モ宜シカラシ。而シテ此職タル東宮職中御教育主任者ヲ除キテハ最モ緊要ナル位地ニシテ、其人物宜シキヲ得ザルベカラザルハ論ヲ俟タズ。東宮ノ御性質、御體質、其他從來東宮御殿ノ慣例ヲモ知悉シ、又現今教育上ノ思想ヲモ有スルモノタラザルベカラズ。

又武官侍補(大佐位ノ所)ハ武事御教育ノ首モナル御補佐者タルモノナルヲ以テ、最モ其選ヲ重シゼザルベカラズ。

東宮侍從モ平素近侍スルモノナルヲ以テ良人物ヲ得ザルベカラズ。又人物相當ニ官等ノ高下ヲ定メ、又新舊ノ區別ヲナシテ獎勵ノ道ヲ立テザルベカラズ。其人員多キヲ要セズ、三名位ニテ可ナラン。

東宮武官亦武事御教育ヲ擔任シ且ツ平常近侍スルモノナルヲ以テ、其人ヲ得ザルベカラズ。

但シ武事一片ニテ嚴猛ニ過グルモノハ適當ナルモノニ非ラズ。其人員三名位ニテ可ナラン。

東宮主事ハ能ク東宮御殿ノ慣例ヲ知り、宮内省ノ事情ニモ通ゼル敏活ナル事務家ヲ以テ之ニ任ズ。

東宮教官(又ハ東宮御用掛ト稱スルモ可ナラン)現今東宮御學問ノ程度ハ尋常中學ニアラセラルレドモ、亦特別ナル教授法ヲ用ヒザルベカラザルコトアリ、故ニ大ニ其人物ヲ選バザルベカラズ、其人員ハ御學科ノ數ニ應ズ。

右ノ外教官又ハ御用掛リノ名稱ニテ教育學專門ノ人一名ヲ要ス。何トナレバ前來詳述セシ如ク、現今東宮ノ御教育ト申シ乍ラ、一名ノ完全ナル教育學者ナク、御學科ノ教授上、又内廷ニ於テノ御薰陶上、教育學者ノ學說ヲ聞クコト最モ必要ナレバナリ。

東宮侍醫ニハ前述セシ如ク適當ナル者一人ヲ選ンデ御主任醫トナシ、御平常及ビ御異例ノ節モ敢テ變ズルコトナキヲ要ス。尤モ毎夜宿直ノ人ハ從前ノ通りニテ宜シカラシ。

右ノ外、御學友若干名從前ノ通り。

内親王殿下御教育意見

下田歌子

内親王殿下御家庭教育ニ關シ御養育主任常宮殿下

從二位伯爵佐々木高行殿ヨリノ下問ニ對スルノ鄙見

歌子謹而ワガ内親王殿下ガ御家庭教育ノ將來及ビ其方法ニ對スル下問ニ答ヘ奉ラントシテ、爰ニ先ヅ其女子教育テフモノノ大要ヲ摘ミ、次ニ本邦從來行ハレ來タリシ皇族名門女子教育ノ概略及ビ其現今行ハレツツアル所ノ歐洲諸皇室ノ家庭教育ニ及ボシ、又ワガ女子一般ノ教育將

來ニ期スル所ヲ述べ、而シテ諸内親王殿下ガ御教育ノ將來ニ於ケル鄙見ヲ陳述セントスルモノナリ。何トナレバ其目下新タニ得ル所ノ女子教育ノ方法イカニ善美ナルモノアリトイフトモ、先ヅ其古來ノ習慣上ヨリ來タレルワガ國女子教育ノ歴史ヲ探知シタル上ナラデハ、決シテ其長ヲ取り、短ヲ補ヒ、以テ完然ナル結果ヲ得ベキ目的ヲ立ツルコトヲ得ベカラザルベケレバナリ。而シテ此事タルヤ實ニワガ朝今古未曾有ナル維新ノ大政後、始メテ新タニワガ皇室ニ於ケル皇女子教育ノ方法ヲ規定アラセラルベキ御參考ノ一タルベケレバ、或點ニ於テハ事少シク忌憚スベキモノ無キニシモ非ザルベシト雖モ、濫リニ之ヲ庇曲删除センコトハ却而其明ヲ蔽フノ恐レ無キニ非ラザルベケレバ、爰ニ歌子ガ微衷ノアル所、且ツ其見聞ノ儘ヲアラハニ錄シテ閣下ノ座右ニ呈セントス。希クハ閣下能ク之ヲ取捨折衷シテ、不肖ヲシテ其過チヲ少ナカラシメナバ幸ヒ甚シカラシ。

目次

一、教育ノ要

一、女子教育ノ精神

内親王殿下御教育意見

一、(第一期)我皇室從來ノ女子ノ教育

其體育

其智育

其德育

一、(第二期)儒佛ノ女子教育ニ及ボシタル影響

其德育上ニ及ボシタル佛教

其智育上ニ及ボシタル儒學

其體育ノ衰へ

皇女教育ノ主任者

家庭女師

學科課程

一、(第三期)武家ノ女子教育(女子壓制ノ弊)

其德育(精神教育)

其智育ノ衰へ

其體育ノ發達

一、(第四期)上流女子ノ精神教育中等以下ニ移ル

一、(第五期)歐米女子教育風ノ渡來

一、歐洲皇室ノ女子教育

母后、ナース、女師

學科課程

其體育

其德育

其智育

内地外國ノ旅行

皇女ノ務メ

一、歐米德育ノ基礎

一、日本女子教育ノ將來

一、内親王殿下ガ御家庭教育

御養育主任者

御教育主務及ビ教官

内親王殿下御教育意見

御體育
御德育
御智育
御學科
御就學時間
學科以外ノ御教育
結論

教育ノ要

抑モワレノ所謂教育テフモノハ其未ダ知ラザルノ人、其未ダ學バザルノ民ヲ導キ、以テ之ヲ教ヘ、之ヲ育ツルノ意ニテ、其固ヨリ有ル所ノ本然ノ善ヲ助ケ、又其弊習ノ惡ヲ除キ、之ヲ徐暢改良シテ其好果ヲ得シムベキノ謂ヒナルベシ。恰モコレ彼ノ園丁ノ花ヲ作ルニ當リテ、菊ハ猶ホ同種屬タル菊科ノ中ニ於テコソ之ヲ培ヒ、之ヲ養ヒ、其色ヲ麗クシ、其形チヲ大ニシ、又其薫リヲ好クシ、且ツ其曲レルノ枝ヲ切り、縮メルノ葉ヲ摘ミ、而シテ能ク菊花ガ天然ノ美ヲ

益々完美ナラシメンコトヲ務ムルモノナレバ、若シ夫レ薔薇花ノ美ヲ美ミ、其花ヲ取リテ菊枝ニ咲カシメントシ、其香ヲ移シテ菊花ニ薫ラシメントセバ、縱令園丁ノ妙技巧ミニ造化ノ巧ヲ奪ヒテ偶マ其變形奇異ノ物ヲ出シタリトモ、菊花ハ菊花ガ天然ノ美ノ艷麗ナルニ若カズ、且ツ必ラズヤ此法ヲ以テ容易ニ一般ニ普及シ能ハザルベシ。故ニ園丁ガ百花ヲ培養スルハ其方法ニ於テハ普ク其良法ヲ求メ、其好果ヲ考究シ、以テ益々其花ヲ美ナラシムベシト雖モ、決シテ異種屬ノ花卉ヲ取リテ新種奇形ノ物ヲ造ラントスルハ實ニ甚ダ不可ニシテ、必ラズ其ノ徒勞ニ屬スベキト一般、教育者ガ其兒童ヲ薰陶感化スルノ注意、應ニ此園丁ノ培養法ニ鑑ミザル可ラザルナリ。

況ンヤ女子教育ノ如キ殊ニ其方法ヲ講ズル最モ其用意周到ナランコトヲ要ス。

女子教育ノ精神

如何トナレバ、女子ノ性質ハモト單純ナリ、狹隘ナリ、故ニ一旦物ニ染リ、事ニ感ズル時ハ其色極メテ濃厚深沈ニシテ、之ヲ除去脱却スルコト決シテ容易ナラズ。サレバコソアレ何レノ國ニ於テモ其教神ノ觀念ノ如キ、其宗教ノ思想ノ如キ、女子ハ必ラズ男子ヨリモ敦厚ニシテ且ツ強固ナリ。而シテ女子ハ實ニ國ノ母タリ、女子ハ能ク民福ヲ生ミ、女子ハ能ク國利ヲ長ズ。

内親王殿下御教育意見

知ルベシ。彼ノ廟堂ニ立チテ宇宙ノ機運ヲ變更シ、彼ノ陣頭ニ臨ミテ萬軍ノ生命ヲ左右スルノ英雄俊傑モ、皆コノ窈窕タル淑女ガ纖手ニ抱カレタル可憐ノ小兒ナルコトヲ。凡ソ女子ノ徳ハ温乎タルコト玉ノ如ク、霰然タルコト恰モ春陽紅霞ノ棚引ケルガ如クナルベシ。然レドモ不幸ニシテ萬一其逆流ニ陥キルコトアル時ハ、凜烈タル節操ハ恰モ冬嶺孤松ノ秀ヅルノ趣キアリテ、猛威骨ヲ剝グノ寒風ニモ堪ヘザル可ラズ。嚴峻膚ヲ刺スノ氷雪ヲモ忍バザル可ラズ。而シテワガ朝從來女子教育ノ結果トシテ傳フル所ノモノヲ見ルニ、其温良玉ノ如キ和徳ハ畏コケレ共、ワガ帝室及ビ公家ノ女流ニ多ク、壯烈刃ノ如キ氣節ハ却テ其幕府武門ノ婦人ニ少ナカラザリシガ如シ。是レ其武家ハ戰亂ノ際ニ顯ハレタル績多クシテ、公家ハ概ネ治世ノ時ニ知ラレタル事多キニモヨルナルベシト雖モ、亦別ニ徳育、即チ精神教育ノ如何ニ基キスルコト多キニヨレルガ如シ。(猶ホ委シクハ次段ニ述ベシ)。斯ノ如ク女子ハ其ノ國利民福ヲ生ムノ母ニシテ、而シテ女子ガ物ヲ信ズルノ力甚ダ強ク、且ツ固キガ故ニ、然カモ其慈悲愛憐ノ情、男子ニ比ベテ殊ニ最モ甚シキガ爲ニ、其慈愛ノ懷ロニ生長スル此未來ノ國民ハ、實ニ其母ノ賢不肖ニ依リテ相消長スルモノナリトイフトモ敢テ不可無カルベシ。且ツ殊ニワガ皇統一系、萬世不易、各國無比ノ御國體ニ於テハ、上ノ好ム所、下必ラズ之ヨリ甚シキモノアリ、其君主ノ徳ノ蒼生ヲ風靡スルコト亦最モ甚シトス。故ニワガ 皇室ニ取ラセ玉ヘル女子教育方針ノ如何ハ、實ニワガニ

千餘萬ノ女子ガ將來ニ影響スルコト亦誠ニ尠カラザルベシ。而シテ前條述ブルガ如ク、教育ハ園丁ノ花ヲ作ルニ似テ、其培養ノ方法ニ於ケル自己ノ長ヲ助ケテ他ノ長ヲ取り、以テ其天然ノ美ヲシテ益々完美ナラシムベシ。決シテ其苗ノ長ズルヲ助ケズ、又益無シトナシテ拔キ去ル可ラズ。故ニ其方針ヲ規定セント欲スルニ當リテハ、先ヅ其ワガ國古來習慣ノ上ニ成立テタル女子教育ノ大要ヲ摘述シテ以テ其古キヲ温ネ、之ニ加フルニ今ノ歐洲諸國ニ於ケル實例ヲ求メテ其新ラシキヲ知り、始メテ能ク良師ヲ作り、又能ク良法ヲ定ムベキナリ。

第一期 ワガ皇室從來ノ女子教育

其 體 育

謹デ我朝歷世ノ史傳ヲ按ズルニ、上古ハ本邦固有尙武ノ教育盛ンニシテ、皇后御自ラ至尊ニ代ラセ玉ヒ、遠ク外國ヲ征シ、皇妃又能ク皇子ト共ニ軍陣ニ從ハセラレシ事モアリ(神功皇后、弟橘姫命等)、又或時ハ嶮峻ナル高峰ニ攀ヂテ其御獵ノ場ニ出デマシ、或時ハ沙漠タル曠原ニ歩シテ其遠征ノ途ニ登リ(雄略天皇ノ皇后、日本武尊ノ二妃ノ類)、翠帳紅閨ノ裡ニ人ハ成ラセ玉ヒシ巾幗ノ體身ヲ以テ、梳風沐雨、馬ニ跨リ弓ヲ取り、外ニ男子ト共ニ辛酸ヲ嘗メテ更ニ恐シシ撓ムル所在ラセ玉ハザリシヲ見レバ、イカニ其精神ノ強且ツ爽ナリシカモ知ラルベク、從テ其

強且ツ爽ナル精神ヤ必ラズ常ニ其健康ナル身體ニ宿リシコト識者ヲ俟タズシテ知ルベキ而已。

智 育

且ツワガ朝ハ開闢ノ昔ヨリ詠歌ノ風盛ンニ行ハレ來タリテ、此英邁ナル女性ノ亦妙ニ天然優美ノ資ヲ供ヘラレタル、アハレニモ亦愛タシトイフベシ。(神武ノ皇后ヲ始メ奉リ、彼ノ豪邁ナル神功皇后、弟橘姫命ノ如キモ、實ニ優美艷麗ナル詠歌アルコト枚舉ニ遑アラズ)。

德 育

故ニワガ 皇室歷朝ノ御家庭教育ハ實ニ 神武叡聖ナル 祖宗ノ御遺訓ニ基キテ、而シテ其精神ノ教育モ亦大イニ稱揚シ奉ルベキモノ少ナカラザリシナルベシ。

第二期 宗教ノ女子教育ニ及ボシタル影響

然レドモ世ノ開明ニ赴クニ從ヒテ其事物モ複雑トナリ、事物ノ複雑トナルニ及ベバ其レニ從伴シテ幾多ノ困難ヲ生ズルハ實ニ理ノ應ニ免レザル所ナルベシ。サレバ其ノ始メ蒙昧未開ノ時代ニ在リテハ庶民ハミナワガ 天皇ヲ神トシ崇メ事ヘマツリテ、ヨシ縱令或ル點ニ於テ時ニ或

ハ其正ヲ誤ラセ玉フコトアリシニモセヨ、コレヲ誹譏シ、コレニ違反シ奉ル者更ニ之レ無カリシガ、物移リ星變リテハ終ニ其蕭牆ノモトニ亂臣ノ隙ヲ伺フ者モ出デ來リ、王城ノ裡賊子ノ不軌ヲ企ツル者モ起ルニ及ビシカバ、其不道ヲ懲ラシ、其道ヲ獎勵スベキ所謂正心誠意、修身齊家ノ規則立チタル教育ヲ施スベキ希望ハ、彼ノ神功皇后三韓ヨリ御凱旋ノ後、儒教ノ傳來ト共ニ其機運ヲ促シ、即チ其仁義忠孝ナル教ヘノ光ハ忽チ九重雲深キ所ヨリ耀キソメテ、遠ク一千六百十有(十一年)餘年ノ久シキ今日ニ迄其餘輝ヲ引クコトトハ成レリキ。後幾程モ無クテ更ニ印度ノ佛教ハ支那、三韓ヲ經テ又ワガ國ニ渡來セシ其ノ當時ハ、ワガ朝固有敬神ノ教ヘニ稍ヤ抵觸スル所アリシカバ、之ガ爲ニ多少ノ紛擾ヲ醸シタルモ、後終ニ彼ノ佛法王法同一ナリトノ方便ハ妙ニ其固有ノ敬神說ト新來ノ佛法論トヲ調和シテ、遂ニワガ神ナルモノハ現世ヲ守護シ、彼ノ佛ナルモノハ後世ヲ救濟ストイフガ如ク、凡ソ子生マルレバ神社ニ告ゲ、人死スレバ寺院ニ送ルトイフガ如キ、又儒教ハ主トシテ其過タントスルヲ正シ、佛法ハ重ニ其過レルヲ救フトイフガ如ク、神儒佛ノ教ヘハ三分鼎足ノ形ヲナシテ格別ノ紛爭ヲ引起スコトモ無ク、中ニハ多少儒佛ノ及ボシタル弊害アリシニモセヨ、要スルニ皆ワガ智徳ヲ啓發スルニ於テ大イナル利益ヲ與ヘタルモノト謂ハザル可ラズ。抑モ儒佛ノ教ヘ傳來セシヨリコナタ、ワガ文運ノ進歩ハ奈良ノ朝ヨリ傳ハリテ、平安ノ御世ニ至リテ茲ニ益々其速力ヲ増進セシメタリト雖モ、此文華

ハコゴ獨リ竹園ノ裡、椒房ノ奥ニノミ其光明ヲ集メ、滔々タル天下庶民ノ子弟ニ至リテハ一丁ノ字、一畫ノ文ダモ解セザル者多カリシニ反シテ（安部宗任ハ歷然タル奥羽ノ一豪族ナルニ、猶ホ朝廷ノ使臣ハ其梅花ノ名ヲダモ知ラザル者ナリト誤想セシニテモアルベシ）、當時后妃、内親王ノ如キ女流ニ在リテモ、文武學術共ニ相進ミ、巧ミニ能ク唐詩ヲ賦リ、漢文ヲ綴リ、又能ク佛語法文ヲシモ翫味シ玉フ御方サヘモ尠ナカラザリキ。且ツ儒佛ノ教ハ主トシテ女子ヲ壓ヘ、女子ヲ賤シミシニモ關ハラズ、我朝ニ於テハ其男女交際ノ上ニコソ少シク其影響ヲ蒙リシトハイヘ、却テ是等ノ學ノ輸入流行セシヨリ女流ニ博識秀才ヲ出シ、又一種他ニ或ル原因ノ有ルアリテ、女子ノ權ハ却テ此最モ佛教隆盛ノ時ゾ甚ダ強カリケルモ亦奇ナリト云フベシ。（光明、檀林二后ノ儒佛ニ通曉シ、有智子、嘉智子兩内親王ノ詩文ニ熟達シ玉フノ類）。

德 育

今左ニ是等ノ諸皇女ガ御教育ノ課程及ビ其方法ノイカナリシカラ略述センニ、凡ソ德育ノ基礎ハ本邦固有敬神愛國ノ意ニ基ヅキ、勸善懲惡ノ教ハ專ラ儒學ニ依リ、慈悲善根ノ德ハ佛法ヨリ來タルコト多カリキ。而シテ當時佛門ニハ名僧智識ノ沛然トシテ四道ニ起レルモノ雲ノ如ク、彼等ハ其門地ヲ尊ビ名族ニ制セラレシ古來ヨリノ習慣ヲ排シテ、獨リ人爵範圍ノ上ニ居リ、忝クモ尊貴ノ御方ヲシモ呼ブニ佛弟子トイフヲ以テスルニ至リ、遂ニ佛威法力ハヤ、モスレバ朝權モ之ヲ壓スルコト能ハザルニ及ベリ。

智 育

是ノ時ニ當リテヤ、儒學ハ僅カニ中等以上ノ社會ニノミ行ハレシニモ關ハラズ、佛教ノ化ハ遠ク寒村僻地ニモ及ビ、其皇族名門ノ子女靡然トシテ慈惠ノ善行盛ンナリシモ皆大抵此佛教ニ基キセザルモノ無ク、從テ身深宮ノ裡ニ人ト成ルノ貴女モ物ヲ憐ミ人ヲ惠ミ且ツ其貧困ヲ思ヒ遣ルノ情深ク、加フルニ唐末文藻詞花ノ艷麗ナル文化ニ薰セラレタル結果ハ、其意匠、其風姿實ニ多憐多感ノ淑女ヲ出シタリシモ、後終ニ其弊ハワガ朝固有ノ外柔内剛ナル女流ノ氣節ヲ阻喪シテ、却テ鄙野疎朴ナル武人ノ爲ニ抑制セラル、ノ止ムヲ得ザルニ至レリキ。

體 育 ノ 衰

精神ノ教育既ニ斯ノ如クナレバ其體育ノ如キモ上古尙武ノ習俗ハ頓ニ一變シテ、其馬ニ乘リ弓ヲ取ルガ如キハ、貴族ニ在リテハ男子ニスラ其カタ許リヲ稀レニ見ル所トナリモテ行キテ、貴女其外ニ出ヅル時ハ牛車ニ乘リテ猶ホ翠帳朱簾其面ヲ覆ヒ、偶マ社寺野外ノ散步モ長裾長袖

其進退意ノ如クナラズ、侍女ノ助ケヲ得ルニ非ザレバ容易ニ行歩スルコト能ハザルニ至リ、其結果畏クモ 皇室貴族ノ子女ニ續々早世ノ不幸ヲ見ルコト多キニ至レリキ。

皇女教育ノ主任者

是ヨリ猶ホ前段ニ溯リテ其皇女方御家庭教育ノ細目概略ヲ申サンニ、抑モ當時后妃ハ必ラズ内裏ニ御常住ノ宮闕在シマシテ其 至尊ニ侍リ玉フ時ノ外ハ、大抵其私殿ニ住シ玉フト雖モ、皇子女御降誕ノ前後數月間ハ多クハ其御里邸(后妃ノ御生家)ニ於テ保養シ玉フ例ナルガ故ニ、其降誕アラセ玉ヘル皇子女ノ如キモ御生母ト共ニ其所ニ在シテ其還御ト同時ニ宮中ニ移リ住ミ給フモアリ。又ハ其儘猶ホ數年間御里邸ニ残り止マリ給ヒテ、稀レニハ其外戚ノ祖父母ガ奉扶ノモトニ生長シ玉フ御方モ在シマシキ。

家庭女師

カクテ皇女ノ御教育ハ概ネ其ノ御生母ノ御擔任ニシテ、其膝下ニ人ト成ラセ玉フナレバ、之ガ爲ニ乳母、保母及ビ女師ヲ撰定シ、之ヲシテ讀書、作文、詠歌、習字、音樂、手工等ヲ授ケ奉リシナリ。此ノ女師等撰定法ハ大抵中等ノ家格アル家ヨリ撰拔セラル、コトニテ、當時女流

ノ秀才ヲ數フルニハ是等女流ノ外ニハ其人アル無シトイフモ不可無カルベキ迄充分ノ精選ヲ勉メラレタリシニ似タリ。(勿論當時保母ノ名無シ、タダ徳望ナル婦人ヲ撰ビテ其智徳ノ教育ヲ任ゼラレタルヲ爰ニ假ニ約シテ保母ト號ケ置キツ)、即チ保母、女師等(乳母ハ勿論)ノ如キハ大抵其御殿内ニ常住スルモノ多カリシカドモ、其ノマレニハ外ヨリ通勤シテ教授シ奉ルモノモアリキ。而シテ彼等ガ平素其局ニ在ル程ハ極メテ自由ナルモノニシテ、其女友、姻戚等ノ來往面會モ頻繁ナル上ニ、己レマタ屢々出デテ社寺ノ説教ヲ聽キ、貴族ノ法會ニ詣デ、又且ツ其ノ女友ヲ訪問スル等、凡ソ彼等ガ其往來セル社會ノ爲メ其智識ヲ増進シ、其ノ交際ニ熟練スルノ機會ハ甚ダ多ク、之ヲ彼ノ舊式古格等事實ニ非ザル勝手ナル制限法ヲ以テ女子社會上ノ智識ヲ増進スベキ機會ヲ與ヘザリシ徳川幕府時代朝廷ノ女官ノ如キ極メテ窮屈ナルモノニハ非ザリシナリ。

學科課程

次ニ其皇女方教授ノ方法ハ略ボ毎日時間ヲ定メテ其學術技藝ヲ授ケ、之ガ復習、譜記等ヲセサセ奉ルハ勿論ノ事ニシテ、其坐作、進退、言語、動靜ノ事ニ至ル迄其ノ貴女タルノ品格ヲ保チ、其ノ風采ヲ完タカラシメント教ヘタルコト實ニ勉メタリトイフベク、從ヒテ其頃才徳アル

貴婦人が貞淑ナル慧性、嫺雅ナル風姿ヲ追想スルニ、到底後人ノ能ク企テ及バザルモノアリシコトヲ信ズルニ足レリ。

又其御母后妃御身自ラモ之ヲ教ヘ之ヲ誡メテ敢テ苟クモシ玉ハザリシコト、之ヲ彼ノ徳川幕府時代中頃ヨリノ習慣タリシ諸侯ノ奥ニ於テ、其夫人ハ名アリテ實無ク、其ノ夫ニ事ヘ、其子ヲ教フルモ皆其臣僚侍婢ノ手ニ一任シテ更ニ顧ミル所無キガ如キモノニハ非ザリシナリ。蓋シ保元、平治ノ戦亂後ハ朝廷百般ノ儀禮モイカガアリケン、終ニ其跡ノ史上ニ徴スベキモノ尠ナキニ至リシハ畏シトモ畏ク、強テ云ハンモ罪得ガマシキ事ニシアレバ暫ク爰ニ筆ヲ止メテ、コレヨリ更ニ當時武門上流女子教育ノ大略ヲ述ベン。

第三期 武家教育

抑モワガ朝上代ニ於テハ女子ノ間ニモ普ク行ハレシ尙武ノ遺風ハ、其ノ鐘鼓相和ギ、琴瑟相樂ミ、世ハ常ニ泰平無事ナリトシテ櫻ヲカザシ、梅ヲ折り、春日駘蕩ノ時ヲ長シヘニ願ヒタリシ紫微宮闕ノ裡ヲ去リテ、常ニ其劔火硝烟ノ中ニ其武勳ヲ輝カシタリシ武家ノ家庭ニ相傳ハレルニ似タリ。故ニ鎌倉幕府ノ創立ヨリ此方、徳川幕政ノ初年ニ至ル迄ハ、其將校ノ夫人ガ節ヲ守リ義ニ死スルノ潔カリシコトハ實ニ其中庸ヲ越エテ悲壯ノ極ニモ達シタリトイフベシ。

徳 育

是ノ時ニ及ビテ、ワガ國女子ガ先天固有ノ美質トモイフベキ其最敬最愛ノ親夫ノ爲ニ（或場合ニハ其君ノ爲ニモ）世ノ榮辱毀譽ノ外ニ立チテ、其身ヲ忘レ其命ヲ捨テ、其道ヲ全ウシタリシ類、其苦節勵行ハ其武家教育ノ結果トシテ實ニ異邦ニモ決シテ見ル可ラザルノ獨特無比ノ事跡ヲ殘スニ至レリキ。

女子壓制ノ弊

其因ヲ押セバワガ敬神ノ良舊慣、崇佛ノ好習俗ハ自然ニ一種ノ信仰心ヲ堅ウシ、又漢土傳來ノ儒學、即チ忠孝ノ教ハ、ワガ尙武ノ遺風ト相和シテ其義ニ依リ其信ヲ守リ、名ヲ重ンジテ利ヲ輕ンズルノ俗ヲ作ルニ至レリキ。然レ共其不慈ノ親ニモ孝ナラザル可ラズ、其無情ノ夫ニモ貞ナラザル可ラザルノ教ヘハ、獨リ善良貞淑ノ女子ノミヲ押ヘテ、却テ其妬奸醜惡ノ婦人ニハ益無カリシガ如シ。是レ其壓力ノ強キニ過グル所、終ニ其鬱積ノ氣ハ爆然トシテ其出ヅルニ道無キ所ニ發シタルモノカ、女子教育ノ衝ニ當ル者、深ク爰ニ注意セザル可ラザルコトナルベシ。

サテ其智育、即チ文學技藝ノ如キハ遠ク皇室公家ノ教育ニ及バザルコト萬々ニシテ、其學ブ所ハ重ニ機織、紡績、裁縫等ノ技ノミニ止マリ、其偶マ詠歌、作文ノ見ルベキ管絃音曲ノ傳フベキモノアリトイヘドモ、其ノ公家文學ノ隆盛ナリシ當時、上流諸媛ノ手ニナレル詩歌、文章ニ比ブル時ハ、花ノ側ラナル深山木ニモ若カザリシガ如シ。

體 育

又其ノ體育ニ於テハ貴女モ能ク馬ニ乗り、劍ヲ遣ヒ、座右常ニ薙刀ト匕首トヲ携フルガ如キ、其ノ戰時ニ在リテハ野臥露宿ノ辛苦ニ堪ヘテ更ニ恐ル、所無カリシコト、到底泰平ノ男子ハ企テ及ブ可ラザル如キ充分ノ體育ハ其必要ニ迫マラレテ自然ニ行ハレシモノナルベシ。

第四期 上流女子ノ精神教育中等以下ニ移ル

然ルニ徳川幕府時代、世漸ク昌平ノ祥氣ニ醉ヒテ其武家上流ニ在リテハ男女共ニ尙武ノ氣象漸次ニ衰ヘ、其體育ノ不完全ニナリモテ行キシハ云フモ更ニテ、其ノ精神教育ノ如キモ亦甚ダ

微弱ナルモノトナリ、其ノ維新ノ前、四海漸ク騷然タルニ及ビテ、其婦人中ニモ貞操義烈ノ行ヒアルモノヲ出シシハ、大抵其中等以下ニシテ、殊ニ外藩地方ノ中ニ多カリシナリ。
以上ハワガ上流女子ノ教育變遷ノ極メテ概略ナルモノニ止マリテ、今此簡單ナル一篇ニ能ク其委シキヲ盡クスニヨシナシト雖モ、要スルニ女徳ノ衰ヘハ常ニ精神教育ノ衰ヘニ起因スルコト今古實ニ同一轍ナルガ如シ。

第五期 歐米女子教育風ノ渡來

斯クテ明治ノ大政革新ノ大稜威ハ其徳川幕府ガ治世三百年間ノ迷夢ヲ破リテ、之レト共ニ輸入セラレタル歐米文化ノ風ハ漠然トシテ舊物ヲ殘ス所ナク、六十餘州ノ積塵ヲ拂ヒテ以テ大イニ新事業ヲ布設セラレシカラニ、其ノ女子教育ノ如キモ古來ノワガ習慣ト歴史トヲ顧ミルニイトマ無ク、然カモ其海路甚ダ遠カラザル米國女子教育ノ方法ハ、最モ早ク海ヲ渡リテ我が國內ニ流行セシカバ、或ル事柄ニ於テハ又甚ダ好ミスベキモノ、取ルベキコト多キニモセヨ、其國體ト其慣習ト、殊ニ最モ相似ザル所ノモノ先ヅ其嚆矢トナリ、其基礎トナレリシハ又實ニ遺憾ト云ハザル可ラズ。然レドモ爾後ワガ教育者ガ數年ノ經驗ハ爰ニ漸ク其長短良否ヲ熟知シ、之ヲ取捨折衷スルノ端緒ヲ得タレバ、今ヨリ漸次其全キヲ得ルノ時モ遠カラザルベシ。猶ホ一般

女子教育ノ將來二期スル所ハ後段ニ略述スベク、是ヨリ進ミテ現今行ハレツ、アル歐洲帝王國皇女教育ノ概要ヲイハン。

歐洲皇室ノ女子教育

歌子ガ在歐中親シク見聞セシ貴族ノ女子家庭教育ノ形狀ハ、其國ニヨリテイサ、カ差フ所無キニシモ非ラズト雖モ、要スルニ其方法ハ大同小異ニシテ、皇子女ハ小學校ニ入ルノ年齢ニ至ル迄必ラズ其生母ノ膝下ニ教養セララル。

母后、ナース、女師

皇子女生マルレバ「ナース」(小兒看護婦)先ヅ其嬰兒ニ關スル一切ノ事ヲ擔當シ、侍女ハタゞ僅カニ「ナース」ガ助手トシテ之ヲ補クル迄ナルガ如シ。而シテ生母產褥ヲ離ルレバ「ナース」ト共ニ其兒ノ爲ニ衣ヲ更ヘ、乳ヲ薦ムル等、生母自ラ手ヲ下サル、コト決シテ少ナカラズ。又之ガ爲ニ頭巾襖衣ヤウノ物ヲモ製作サル、事モアリテ、格別普通ノ家ノ母親ニ異ナル所アルヲ聞カズ。就中獨逸皇室ノ如キハ殊ニ最モ其内廷極メテ質素ニシテ、皇后自ラ胸ニ前掛ヲ施シ、皇子女ノ沐浴ニ迄與カリ、又其轍ヲシモ編ミ、其食物ヲシモ手ヅカラ調理セラレシコトサヘア

リキト聞キス。

サテモ皇女年ヤ、長ジテ幼稚園ニ入ルノ齡ニ至レバ、之ガ爲ニ家庭教師(必ラズ女子ナリ)ヲ聘シ、之ニ托スルニ其教育一切ノ事ヲ以テシ、母后ハ必ラズ友人ノ資格ヲ以テ之ヲ遇シ、女師ハ毫モ憚ル所無ク之ヲ教ヘ之ヲ誡メ、其緩急溫嚴ノ度ノ如キ、常ニ能ク其母后ト計リテ其教育ノ方針左右一途ニ出デン事ヲ務ム。而シテ時ニ専門科ノ教師ハ一週ニ數回其外ヨリ來リテ教授スルモアレドモ、其教育ノ方法程度ノ如キ皆此專任ノ家庭女師ニ量リテ其差誤ナキヲ勉ムルガ故ニ、ヨシ各種ノ學科ニ就キテ各教師ノ分擔教授スルコトアリトモ、更ニ其受業者ヲシテ左ニ引キ右ニ導クガ如キ迷惑ヲ感ゼシメザルナリ。又コレニハ此擔當ノ家庭女師皇女ニ附添ヒテ或専門科ヲ修ムルガ爲ニ、他ノ學校ニ通學サル、コトナキニシモアラズ。(現ニ今英國女皇陛下ノ孫女、アル女學校ノ衛生科ヲ修ムル爲メ一週ニ二回其女師ト共ニ通學サル、ヲ見タリ)。

學科程度

學科ハ大抵普通ノ女學校ニ修ムルモノト同一ナリト雖モ、皇女ハ特ニ各國ノ語ヲナルベク多ク修メラル。(第一ハ佛語ニシテ其他少ナクトモ英、獨、羅、希ハ學バセラル)。

體 德 智 育

日課終レバ勉メテ戶外運動(乘馬、操槽ヲ始メ、各種ノ體操及ビ之ニ類似ノ遊戲)ヲ爲シ、且ツ女師又ハ家族ノ方々ト共ニ微行シテ其智徳ヲ涵養シ、其體育ニ利アルベキ各種ノ事物ヲ見聞センガ爲メ、市中郊外ニモ出遊セラル、コト屢々ナリ。又常ニ父母ノ膝下ニ種々ノ談話ヲ試ミ、猶ホ不熟ナル音樂ヲモ奏シ、舞踏ヲモ演ジ、食ヲ共ニシ、歩ヲ伴ニシ、談笑歡樂、和氣洋洋トシテ親子ノ情誼實ニ甚ダ細ヤカナルコト毫モ尋常一樣庶民ノ家庭ト異ナル所アルヲ見ズ。

内地外國ノ旅行

又冬夏ノ休業中ニハ大抵其父母ニ伴ハレ、或ハ其女師、侍女ヲ從ヘテ内地及ビ外國ヘモ旅行サル、ヲ常トス。

皇女ノ務

斯クテ皇女妙齡ニ及バセラルレバ、婦人ノ團結組織ニナレル幾多各種ノ會長トナリテ之ニ臨席シ、又ハ母后ヲ助ケ、母后ニ代リテ賓客ニ應接セラレ、殊ニ慈善ノ事業、即チ貧院、病院及ビ貧民學校等ノ如キハナルベク私資ヲ出シ、建議ヲ贊シ、勉メテ屢々駕ヲ促サル、事ニテ、其交際モ亦非常ニ多忙繁劇ナルガ故ニ、歐洲ハ他邦ト相比隣シ、相犬牙シタル國柄ナレバ、他國

ノ來賓モ亦頻繁ニシテ、從テ外國語ニ通ズルノ必要ヲ感ズルコト極メテ多キニ居ルナルベシ。而シテ英國ノ如キ今上女皇陛下ハ堅固ナル敬神家ニ在シマシテ、身自ラ斯道ヲ獎勵シ、今猶ホ老體ヲサ、ヘテ日曜毎ニ其常住宮内ノ寺院ニ參謁シ、法教ヲ聽聞スルヲ常トセラル、ガ故ニ、諸皇女ノ如キモ皆之ニ準ジ、勉メテ此教ヘニ歸依信仰サル、コト又最モ厚シト聞キヌ。

歐米德育ノ基礎

總テ歐米德育ノ基礎ハ皆コノ敬神ナル觀念ヨリ、人ヲ愛シ、世ヲ救ヒ、民ヲ憐ムテウ文明社會的道義ノ根本トナリ、上下一般之ニ風靡スルガ故ニ、歐洲各皇室女子教育徳義ノ源亦其母后女師ガ、其襁褓ノ裡ヨリシテ涵養セル神ノ信仰、即チ神ハ善ニ組シ惡ヲ懲ラスモノナリトノ教ヘラ以テ其骨ト爲シ、血ト爲シ、最モ強固堅牢ナル精神ヲ養成スルモノナリ。是ヲ以テ之ヲ見レバ其宗教ノ種別ニヨリテ少シク其色ト形トヲ異ニスレドモ、有神ノ論、即チ冥々ニ恐ル、所アルベキヲ教フルコト、今古東西其精神教育ノ歸スル所、實ニ同一轍ニ出ヅル天別自然ノ道義又奇ナリト云フベシ。

斯ノ如ク彼我今古上流貴女教育ノ方法及ビ其沿革ヲ摘述シ、且ツ又日本女子教育ノ一般、其將來ニ期スル所ノ概要ヲ記ルシ、爰ニ始メテワガ内親王殿下ガ御家庭教育ニ望ム所ノ要領ヲ陳

ブルヲ得ベシ。

日本女子教育ノ將來

今ヤ我が大日本帝國ノ氣運ハ、彼ノ日清戰捷後頓ニ其速力ヲ増進シ、遂ニ俄カニ歐米諸強國ト肩ヲ並ブルニ至リ、從ヒテ其國ト國トノ交際モ益々頻繁親密トナルベク、且ツ其以前ニ於テハ彼ノ我ヲ見ル、僅カニ東海一隅ノ孤島ナリトセシモ、今日ニ至リテハワガ國ノ將來ハ實ニ多望多幸ナリト稱賛欽美スルト共ニ、彼レ又ワガ過失ヲ摘發シテ、量ルニ彼ガ自信ノ定木ヲ以テシ、我が一舉一動ニモ彼ガ容喙ヲ欲スルノ今日、日本女子ガ先天固有ノ美德モ揚起セラレベク、從ヒテ又其匪徳ヲモ看破セラレベク、又且ツ其海外ニ其夫ノ赴任ニ從ヒ、或ハ外藩ニ其父ノ出役ニモ伴フコトアルベケレバ、其徳育ニ於テハ先ツ能クワガ朝固有ノ敬神說ヲ基トシ、其國民的教育ニ日本女子ノ品格志操ヲ堅カラシメ、其體育ハ固ヨリ寒冷骨ヲ刺シ、炎熱膚ヲ燒クノ砂漠曠原ニモ住居スルヲ得ルニ至ラシムベク、其智育モ亦普通教育ノ觀念ヲ進メテ其異域ニ渡リ、其外賓ヲ待ツノ時一二外國語ニモ通曉セシムルニ及ボサル可ラズ。

要スルニ日本女子ハ其他日君ノ爲メ、國ノ爲メ、其干城トナリ、耳目トナルベキ未來多望ノ大日本國民ヲ生ムノ母ニシアレバ、其身體ヲ建康ニシ、其精神ヲ強固ニシ、且ツ其智能ヲ伸暢

シテ決シテ諸外國ノ婦女ニ恥ル所無カラシムルノミナラズ、益々其ノ獨特ノ美質ヲシテ彌ヨ極美ナラシムベシ。彼ノ文明ノ程度ハ其女子ノ程度ノ高下ニヨリテ了知スルヲ得ルモノナリト云フガ如ク、益々進ミテ其女徳ヲ完備ナラシムベキハ、即チ目下ワガ女子教育全體ノ將來ニ取ラル、所ノ方針ナルベシ。而シテワガ大日本帝國ハ實ニ萬國無比ノ御國體ニマシマサ故ニ、其國民ガ君ヲ尊ビ君ヲ思フノ情深キ事モ亦誠ニ比ブルモノ無シト云フベク、從ヒテ其上ノ令スル所忽チ能ク其下ニ感染スルコト、電機ノ物ヲ傳フルヨリモ速カナリ。故ニワガ内親王殿下ガ御教育ノ將來ニ取ラセ玉ヘル方針ハ、即チ是レワガ大日本帝國一般ノ女子ガ前途ノ指南車ナリ、燈明臺ナリ、其轍ノ至ル所、其光リノ及ブ所、決シテ尠少ナラザル可キモノナルコトヲ信ズルモノナリ。

内親王殿下ガ御家庭教育

以上述ブル所ノ如ク、ワガ内親王殿下ガ御教育ノ適否ハ、ワガ國女子教育ノ前途ニ及ボス所ノ影響實ニ莫大ノモノタルベキ次第ハ、彼ノ去ル明治廿三年畏クモワガ至聖至仁ナル 天皇陛下ガ御身自ラ以テ斯民ヲ率キサセ給フベキ教育ノ勅語ニ於テ、其叡意ノアル所ヲ恐察シ奉ルヲ得ベク、而シテ其御家庭教育ノ基礎ハ其奉扶ノ主任者其人ヨリ確實セザル可ラザルモノナリト信

ジテ疑ハザルモノナリトス。凡ソ幼兒教育ハ其慈母ガ恩愛奉ノ如キ懷ロノ中ニ萌芽シテ、遂ニ文園學窓ノ上ニ其美果ヲ結ブモノナリ。故ニワガ朝歷世往古ノ御慣例（其外國トハ少シク其趣キラ異ニスルニモセヨ）及ビ諸外國ノ習俗ヲ徵スルニ、其父母ガ膝下ノ愛育ニ依リテ成ラザルモノ無カルベシト雖モ、ワガ皇室數百年前ヨリノ御習慣トシテ、皇子女御幼少ノ程ハ大抵其生母ノ里邸ニ人ト成ラセ玉フコトトナリ、又且ツ現時ハ別ニ適當ナル奉扶ノ御主任者ヲ撰バセ玉ヒテ之ニ其補育ヲ任ゼサセ玉ヘルモ、深キ聖意ノアラセ玉フニヨルベケレバ、爰ニハ唯ダ其御家庭教育ヲ實施スベキ主任者ト教師トノ分擔責任ニ望ム所ノ必要トヲ申サン。

御養育主任者

抑モ教育ハ總テ其幼兒ガ猶ホ純白ナル精神ト、未ダ脆弱ナル體格トノ發育期ニ於テ其知ラズ知ラズノ間ニ善良ノ美風ヲ薰陶感化スベキモノナルガ故ニ、其襁褓ノ裡ヨリ養育ノ主任ヲ取ル主務者ハ即チ母代ニシテ（母代トハ往古其生母ニ故障アラセ玉フ時之ニ代リテ傳育奉リシ人）、恩愛情誼其所生ノ父母ト格別異ナル所無シトス。故ニ之ガ一顰一笑モ其兒童ノ感情ヲ左右スルコト甚シク、其好惡モ亦自カラ相均シキニ至ルモノナリ。故ニ内親王殿下ガ御養育主任其人ヲ採用セサセ玉フニ當リテハ、充分ノ精選ヲ要シ玉フベキハ勿論ノコトニシテ、一旦之ニ一任セサセ玉フ以上ハ、希クハ其任期ノ出來得ベキダケ久シカラシコトヲ要ス。コレ其教ヘテフモノノ上ニ於テ殊ニ最モ注意スベキ要點ナリトス。

御教育主務及ビ教官

次ニ其ノ御殿ニ伺候シテ教授ノ任ニ當ルベキ者ハ、ナルベク此御主任者ト肝膽相照シ、長短相知ルノ人タラザル可ラズ。而シテ被我其説ク所均シク、内外其導ク所同ジカラザレバ、其教ヘテ奉ズルノ心厚カラズ、其師ヲ信ズルノ念薄キニ至リテ終ニ必ラズ學ヲ厭ヒ物ヲ疑フノ惡結果ヲシモ見ルコト無シトセズ。且ツ其主務教官ハ其御殿内ニ常住スルノ勝レルニハ若カズト雖モ、目下急激ノ進歩ヲ以テ輸入セラルレドモ、新教育ノモトニ作ラレタル所ノ教師其人ニ乏シキ、稀レニ其可ナル者之レ有リトスルモ、猶ホ之ニ許スニ幾多ノ時間ヲ以テシ、能ク其職務ニ就キテ考究勉強シ、完全ノ良師タランコトヲ欲スル時ニシアレバ、先ヅ其外ヨリ來タリ教フルヲ許サセ玉ハンコトモ亦已ムコトヲ得ザルナルベシ。又各學科ニ於テ要スル教師モ其御學業ノ漸次發達アラセ玉フ迄ハ、ナルベク小數ノ人タルベク、且ツ其撰拔ハ専ラ主務教官ノ任トシテ又之ヲ御養育主任者ト商議セシムベシ。而シテ今ヨリ猶三四年間、即チ尋常小學御年齡ノ程ハ、常侍ノ臣ノ御復習ニ侍リテ充分ナルベク、且ツ小學御年齡ノ中ハ出來得ル限リ體徳ニ育ヲ専ラ

トシテ、智育ハ之ニ亞グラ欲スルガ故ニ、其御復習等ノ爲ニ費ス所ノ時間多キハ決シテ取ラザル所ナリトス。

且ツ其教ヘテ授ケ奉ルニ當リテハ、學科ノ程度、教科書ノ撰定及ビ其方法ノ如何ハ、無論御教育主務者ノ擔任專行スベキ事ナルベシト雖モ、前條述ブルガ如ク、其内外彼レ是レ同一ノ意向ヲ以テ之ヲ教育シ奉ルベキヲ要スルガ故ニ、且ツ其體育、德育ノ如キハ、重ニ御養育主任者ノ注意ニヨラザル可ラザルガ故ニ、其教官ハ其授業ノ間ニ於テ奉ルベキ一語ノ褒貶モ決シテ苟クモセズシテ、其御主任者ガ平素ノ意志ト相離反セザルベキヲ要シ、御體育上ニ於テハ其御倦怠ノ色アラセ玉フ時モ、能ク之ヲ彼ニ尋問シテ後ナラデハ濫リニ其倦怠ヲモ誠メ奉ラザルベキガ如ク、約言スレバ御養育主任者ハ體德二育ノ責メ其ノ重キニ居リ、智育ハ唯ダ之ニ伴フニ過ギズ、又御教育主務者ハ智育ノ任、其重キニ居リテ體德ノ二育之ニ亞グベシ。

御 體 育

サテ斯ノ如ク分チ來タリテ先ヅ其御幼少ノ時ニ在リテ最モ注意シ奉ルベキハ體育ナリ。其天資イカニ淑德賢明ニ渡ラセ玉フトモ、萬一若シ其體質御虛弱多病ニ在シマサンニ於テハ、其徳モ施シ玉フ所無ク、其賢モ用ヒサセ玉フ折無カルベシ。是ノ故ニ其御身體發育期ノ最モ速カナ

ル其幼齡ノ時ニ於テハ、其衛生滋養ノ食物ヲ適宜ニ薦メ奉リ、又勉メテ其戶外運動及ビ遊戲ヲ獎勵シ奉ルベシ。世或ハ云ハン、女子ニ活潑ナル體育ヲ施サントスル時ハ、其兒ヲシテ輕跳疎暴、所謂男ヲシキ言行ニ傾カシムコトアリト、コレ實ニ甚シキ謬見ナリ。之ヲ例スレバ長袖嬭ヤカニ能ク武術ヲ學ビシワガ朝武家上流ノ女子、輕裾巧ミニ體操ヲ習ヘル彼ノ泰西貴族ノ女子、亦決シテ窈窕タル可憐ノ淑女タラザルヲ期セズ。能ク其體育ヲ勉メシメタリトモ、德育、智育又能ク其精神ト智力トヲ誘導セバ、決シテ右ノ如キ虞レヲ虞ル、コト無カルベシ。

御 德 育

シカク其健康ナル體格教育ノ完全ヲ求ムルヲ得バ、則チ進ミテ其健康ナル精神教育ヲ務ムベシ。蓋シ身體ハ有形ノモノナルガ故ニ、體育ハ能ク有形ノ結果ヲ見、以テ之ヲ改良助長スルニ難カラズト雖モ、精神ハ之ニ反シテ其無形ノモノナルガ故ニ、之ヲ教フルノ基礎ハ其無形ノモノニ依ラシメザル可ラズ。故ニワガ内親王殿下ガ德育ノ基礎ヲ堅メサセ玉ハンニハ、希クハワガ歷朝 祖宗ノ最モ尊崇信仰セサセ玉ヒシ天ツ御神ヲ齊キ祭リテ其信心ヲ厚クシ玉ヒ、至尊ノ御身タリト雖モ、冥々ニ恐レ慎マセ玉フ所アラセ玉フベキコト、其御志氣ノ最モ純白ナル御幼少ノ時ヨリシテ良習慣トナサセ奉ランコトヲ欲ス。何レノ世、如何ナル國ニ於テモ、ヨシ其

宗教ノ門ハ異ナルニモセヨ、歸スル所敬神論者ハ瀆神論者ノ議論淺薄ニシテ且ツ其正義正道ニ猛進スルコトノ勇氣常ニ乙者ハ甲者ニ若カザルヲ證スベキニ於テヲヤ。斯ノ如ク冥々ニ信ズル所、暗中猶ホ頼ム所アラサセ玉フニ至レバ、必ラズ能ク其人間毀譽名利ノ外ニ超然トシテ御自ラ守ラセ玉フ所益々強固ニ、萬一若シ緩急アルモ事ニ當リテ動カズ、物ニ遇ヒテ驚カズ、端然トシテ能ク其貴女ノ品格志操ヲ保タセ玉フコトヲ得ベシ。

次ニ慈善愛憐ノ御心ヲ養成シ奉ルベキヲ要ス。凡ソ慈愛ノ念ヲ生ズルモノハ親シク其下民貧困ノ情況ヲ見聞セサセ奉ルニ若クハ無シ。百聞ハ一見ニ若カズ。机上十年ノ學ハ現況一日ノ看ニ及バザルガ如ク、則チ往古ワガ后妃皇女ノ屢々社寺ニ詣デ、親シク其乞兒不具ノ貧民ヲ賑ハシ玉ヒシ等、實ニ尊ブベク習フベキノ良習慣ナリカシ。而シテ其實境ニ臨ミテ感シ玉ヘル所ヲ取り、以テ平常修身學科ノ好模範トスベキナリ。シカク常ニ仁心ト氣節トヲ養ヒテ之ニ飾ルニ溫良優雅ノ風様ヲ以テシ、之ヲ望メバ藹然タル恭謙ノ徳内ニ溢ル、ガ如ク、之ニ近ヅケバ巍々乎タル莊嚴ノ威外ニ耀クガ如ク、内剛ニシテ而カモ外柔ナル女徳ヲ兼備セサセ玉ハン事ヲ期スベシ。

御 智 育

而シテ其徳ヲシテ能ク圓滿完備ナラシムベキハ又一ニ智育ノ力ニ依ル。ワガ往昔ノ上流女子ガ智育ノ點ニ於テハ其作文、詠歌、音樂等ヲ以テ普通教育ノ完然ナルモノトセシモ、其今日ニ在リテハ數、理、化學、地理、衛生、外國語ノ如キモノヲ加ヘテ始メテ全キモノトセリ。

御 學 科

勿論ワガ國古來ノ習慣ヨリイヘバ、是等ノ學ハ女子ニ在リテハ最新式ノ學科ナルガ故ニ、其歐米諸國ノ女子ニ教フル所ト同一ナル程度ニマデ及ボサンコトハ固ヨリ今俄カニ望ム可ラザル事ニシテ、ヨシ縱令之ヲ能クシ得ラル、モノナリトスルモ、亦決シテ格別ノ裨益ヲ目前一見ルコト尠ナルベキヲ證スベク、況シテ高貴ノ御方ニ在リテハ殊ニ最モ其適否緩急ノ度モ審ラカニ考究セザル可ラズト雖モ、前條日本女子教育ノ將來ニ述ベタルガ如ク、未來ノ日本ハ過去ノ日本トシテ見ル可ラズ、ワガ内親王殿下ガ他日御成長ノ頃ニ及バ、恐ラクハ外賓ノ來訪頻繁トナリテ、其謁見ノ榮ヲ玉フコトモ亦屢々ナルベケレバ、之ニ對シテ御應答アラセ玉ハン爲ニ一二ノ外國語(第一ハ佛語、次ハ英語)モ學バセ奉ラザル可ラズ。既ニ御詞ヲ交ヘ玉ハ、談必ラズ其殿内ノ圖畫、錦繡ノ事、或ハ御園ノ草木花實ノ上ニモ及ブベク、之ニ伴フモノハ地理ナリ、動植物ナリ、又其歴史ナリ、故ニ其普通學科ノ觀念ヲ只今ヨリ徐々ニ宿シ奉ルコト甚ダ必

要ニシテ、而シテ外國語ハナルベキダケ御幼齡ノ時ニ於テ學バセ玉ハン事ヲ要ス。其發音ニ、其語記ニ、幼少ノ人ノ學ブハ成人ノ學ブ辛苦ノ半バニシテ足レリ。其効果ヲ見ル實ニ爭フ可ラザルモノナリトス。人或ハ曰ハン、兒童ガ幼少無慾無邪氣ノ程其遊戲ノ間知ラズ、外國語ヲ學ブノ易キハ則チ然ラン、然レドモ其ワガ朝ノ經歷國體ノ如何ヲモ能ク知ラザルノ時ニ於テモ、先ヅ其ノ彼ヲ學ブハ不可ナリ。恐ラクハ其本ヲ外ニシテ末ヲ内ニスルノ過チ無キヲ保セザルナリト。其言實ニ理ニ然ルベキモノアルガ如シト雖モ、歌子嘗テ其在歐中親シク其所ニ見聞セシコトアリ、彼ノ英、獨兩國ノ如キ、佛ト相敵視シテ心竊カニ刀ヲ磨クノ國柄ナルニモ關ラズ、其上流女子社會ニ於テハ佛語ハ貴女ガ交際場裡ニ必ラズ用フベキ上品ナル國語ナリトシ、其必習ノ學科ナリトシテ極メテ幼少ノ時ヨリ修ムルモノトスレドモ、其語學ニ通ジ、其國情ヲ知ルニ從ヒテ益々其敵愾心ヲ増進セシムルコト、其學バザルノ前ニ勝ルモノ萬々ナルガ如シ。故ニ教授其人ヲ得テ其教科書ト其方法ト二ツナガラ宜シキヲ得バ、決シテ右ノ如キノ恐レ之アル可ラザルベキヲ信ズルモノナリ。

然レドモ凡ソ日本國民ハ其善ニ移ルニ吝ナラザル機敏ノ氣質ヲ供フルト同時ニ、舊ヲ捨テ新ヲ取ル時、イサ、カ其輕跳火急ノ過失ナシトセズ。是ノ故ニ其洋書ヲ讀ムノ人却テ之ニ讀マルルノ弊無キニシモアラズ。サレバコソアレ其外國語ヲ一般女子ニ教フルト否トノ説モ未ダ全ク確定セズ、且ツ其程度方針ノ如キモ一進一退未ダ其止マル所ヲ見ズ。故ニ爰ニモ先ヅ之等ノ科ヲ省キテ本學年ニ行ハセラルベキモノナリト確信セル學科ノミヲ左ニ掲ゲツ。

一、修身 修身科ハ先ヅワガ 皇室 祖宗ノ神訓ニ基キ 勅語ノ 聖旨ヲ奉ジ、敬神、

遵孝、撫民ノ徳ヲ涵養シ、今古東西ノ賢婦、淑女ノ嘉言善行ヲ摘述シ、以テ其實踐應用ノ方法ヲ務メ、仁慈、溫良、貞淑、恭謙、能ク貴女ノ志操、品格ヲ養ヒ奉ランコトヲ要スベシ。

一、讀書 讀書科ハワガ國文ヲ解シ、國語ヲ綴ルヲ以テ目的トスルモノニシテ、先ヅ其簡易ナル單語單句ヨリ始メテ日用ニ適切近易ナル書牘文、記事文ニ及ボシ、漸次古雅優美ナル國文ヲモ讀ミ且ツ記スニ至ラシメ奉リ、且ツコレガ助ケタルベキ爲ニハ漢文ヲモ加ヘ修メシメ奉ランコトヲ要スベシ。

一、實物 實物科ハ先ヅ其天然ノ現象ト人工物トノ性質效用ニ着キ、其五官ノ望沃ニヨリテ其智能ヲ開達シ、以テ他日博物ニ理化學、生理科等ノ概要ヲ學ビテ其普通ノ智識ヲ啓發スベキ階梯トナスモノナレバ、其教法ト用具トノ如キモ勉メテ卑近適切ノモノヲ撰ビテ御幼齡ノ御方ニモ其趣味ヲ感ゼシメ奉ランコトヲ要スベシ。

一、算術 算術科ハ其表數算法ヲ知ラシメ、運算ニ習熟セシメテ其實際ノ應用自在ナ

ランコトヲ期スベク、殊ニワガ國ノ習慣トシテ大抵高貴ノ御方ニハ最モ數理ノ觀念ニ乏シキガ故ニ、教法ハ極メテ簡明容易ニシテ格別高尚ノ理ニ迄及ボシ奉ラザランコトヲ要スベシ。

一、習字圖畫

習字科ハ先ヅ其姿勢ヲ正ウセシメ、執筆運用ノ方法順序ヲ教ヘ奉リ、漸次消

息文、詠歌等其貴女ニ在リテハ最モ必用ナルベキ書キ方ニ習熟セシメ奉ランコトヲ要シ、圖畫科ハ先ヅ鉛筆畫ヨリ始メテ直線、典線等ノ極メテ容易ナル方法ヲ習ハシ奉リ、次ニ毛筆畫ニ及ビテ東西繪畫ノ長所ヲ取り、其意匠ヲ練リ、筆力ヲ健ニシ、高尚ナル氣韻風致ヲ蓄ヘ玉フベキ美育ノ助ケトセサセ奉ランコトヲ要スベシ。

一、唱

歌

唱歌科ハ先ヅ其發音ヲ正クシ、歌詞、樂譜ノ雅正ナルモノニ就キテ之ヲ練習

セシメ奉リ、漸次彈琴ヲモ學バセ奉ツルノ補益タランコトヲ要スベシ。

斯クテ漸次御成長ニ從ヒ又其御學術ノ進マセ玉フ程度ニヨリテ、歴史、地理、理化、歐語、手工等ノ諸學科ヲモ其實地應用的教育方法ニヨリ以テ之ニ加ヘ奉ツルベシ。

御就學時間

毎日御就學ノ時間ハ三時間乃至四時間ヨリ多カル可ラズ。コレ其時間ハ修身科ヲ除クノ外ハ

大抵ミナ智育ニ屬スルモノニシテ、其德育ト體育トノ如キハ其御就學年限中ハ殊ニ常住坐臥ノ御間ト雖モ、一ツモ皆此教育範圍ノ規矩ヲ越エシメ奉ラザラシメンコトヲ欲スルガ故ナリ。蓋シ教育ハ自然ノ薰陶與リテカアルコト大イナリトス。其自然ニ戻リテ急ニ注入強硬的ノ教ヘヲ施サントスル時ハ、彼ノ室ノ梅ノ季節ニ先ダチテ花咲クコトヲ得ルト雖モ、其花ノ色モ香モ自然ノモノニ劣ルコト遠クシテ、遂ニ其美果ヲ結ブコト能ハザルガ如キ不幸ヲ見ルヤ明カナリ。是ノ故ニ其御幼少ノ御程ハ其御主任者ニ、教官ニ、又其侍臣ニ、スベテ御眼ニ觸レ、御耳ニ入ルモノミナ勸善懲惡ノモノトナリ、知ラズノ間ニ感化セラレ玉ハンコトヲ期スベキナリ。

學科以外ノ御教育

右ニ述ブルガ如ク内親王殿下ハ毎日其御規定ノ學科ヲ修メ玉フノ餘暇ハ、ナルベク勉メテ度宮中ニ參候シ玉ヒ、親シク御父母ノ安否ヲ訪ハセ玉ヒ、又能ク祖宗ノ神社ニ詣デ或ハ信用アル府下ノ各女學校、博物館、動植物園、病院、貧院ノ如キ其慈惠ノ御心ヲ啓發シ、智慧ノ腦力ヲ發達シ、且ツ其御體育上新鮮ノ空氣ヲ呼吸シ、活潑ナル運動ニ補益アルベキ郊外ノ御出マシヲモ勸メ奉ラマホシキナリ。宮中ニ御常住マシクテ、御父母ノ膝下ニ人ト成ラセ玉フコトハ種々ノ御事情ヨリシテ、又數百年ノ御慣例ヨリシテ、今俄カニ行ハセ玉フベクモアラザルベ

ク、且ツ其新舊相混交シ、相衝突スルヲ免レザルノ今日ニ於テハ、其御修學ノ御程ハ御別殿ニマシマシ玉ハンモ或ハ却テ然ルベキカモ知ル可ラズト雖モ、ワガ 皇室 祖宗歷世ノ御遺訓トシテ遵奉セサセ玉フナル御教道ノ完全ヲ求メ奉ランニハ、御親子ノ御情誼親密ナルヲ要スベキハ勿論ノ事ニシテ、既ニ其親密ナランコトヲ欲セバ、勉メテ親シク御自ラ之ニ奉侍シ玉ハザル可ラズ。然ル時ハ畏コキアタリニモ細ヤカニ其御言行ヲモ見ソナハレ玉ヒテ、其御教育ノ缺ケタル所ヲモ補ハセ玉フベシ。又其御兄弟姉妹トモ、ナルベク屢々御對顔アラセ玉ヒテ、共ニ學ビ、共ニ遊ビ、其友愛ノ御情誼ヲ増サセ奉ランコトヲ期ス。又時々宮殿ノ外ニ出サセ玉フ時ハ爲ニ新智識ト新空氣トヲ得テ、其體育、智育ニ益シ、他日臣民ヲ延見シ、外賓ニ應接シ玉フ時ニ於テモ、各種ノ人ニアヒ、何レノ場合ニ在シマストモ、決シテ更ニ臆スル所、恐ル、形チアラセ玉ハザルニ至ルヲ得ベシ。又且ツ一般ノ下情ニ通ジ、民況ヲ知ラセ玉フガ故ニ、其德育ノ上ニ於テ亦甚ダ補フ所少ナカラザルベシ。

結 論

之ヲ要スルニ我内親王殿下ガ御教育ノ將來ハ、獨リ皇女子教育ノ適否如何ニ止マルノミナラズシテ、實ニワガ大日本帝國女子教育一般ノ前途ニ及ボス所ノ影響決シテ尠ナラザルガ故ニ、

其要點中、

- (一) 體育ノ事ニ關シテハ務メテ滋養ノ食物ヲ適宜ニ薦メ奉リ、又務メテ四肢筋肉ノ發達ヲ助長セシメ奉ランガ爲ニ、十分ノ運動ヲ爲サセ奉ル事。
- (二) 德育ニ於テハ人間以外別ニ一個ノ安心立命場、即チ萬古一通ノ大活力ヲ有スルノ現世ニ關ハル信仰心ヲ堅ウシ、其皇女タルノ品格ヲ供ヘ玉ハンコトヲ學バセ奉ル事。
- (三) 智育ハ即チ專ラ其居家、處世、日常實踐ニ必要ナルベキ普通學上ヨリ生ズル智識才能ヲ發達セシメ奉ルコトニ關シ、目下實行上ノ大注意ハ必ラズ共ニ泰西ノ事ヲ其儘ニ模倣スル事ヲ要セズ、彼ガ精神ヲ採リ、所謂換骨脫體シテ以テ我が實態ニ應用スルコト是レナリトス。

即チ日本古來ノ敬神說又ハ養生論等之ヲ今日ニ敷衍應用シ以テ其目的ヲ全ウシ得ベキコト、歌子ガ篤ク信ジテ疑ハザル所ナリトス。蓋シ體育ノ點ニ於テハ兩宮殿下御養育主任ノ從來取リ來タル方法甚ダ宜シキヲ得テ、殿下ガ御發育上ワガ貴族社會ニ於テ多ク見ザルノ好結果ヲ得タルヲ悅ブト共ニ、今ヨリ猶ホ其暢ビント欲スルノ枝ヲ撓メ、結バント欲スルノ實ヲ摘ミテ、却テ其反動ノ不幸ヲ見ルノ過チ無カラヌヲ期ス。是レヨリ智德ノ教育ヲ施シ玉ハントスルノ今日ニ於テ深ク意ヲ用フベキ所ナルベシ。

次ニ御徳育ノ點ニ於テモ先ヅ第一ニ 祖宗ノ神ヲ敬信シ、御父母ヲ愛慕シ玉フノ狀ヨリ、其侍臣ヲ慈シマセ玉フノ御心ヲ其極メテ其幼稚ノ頃ニ於テ養ヒ奉ラレンコト亦甚ダ其可ナルヲ信ズ。

尙ホ今ヨリ進ンデ智、徳、體ノ教育相合ヒ、相俟チテ以テ大器晩成ノ效果ヲ見奉ランコト、歌子ガ切ニ熱望シテ止マザル所ナリトス。

二十六年 度 以 降

歳 費 定 額

既定額ハ廿五年現行ノ定額ナリ。

増額ハ廿六年度ヨリ更ニ増加スベキ額ナリ。

減額ハ廿六年度ヨリ更ニ減却スベキ額ナリ。

差引定額ハ更定ノ固定概定歳額ナリ。

小計	皇后宮費	小計	費	小計	東宮費	小計	御直營費	小計	醫藥費
贈賜物品費	皇 ^四 后宮費	同	同	同	同	同	富 ^美 宮御養育料	同	同
六四,〇〇〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇,〇〇〇	四八,〇〇〇,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇
二六五,〇〇〇	一七六五,〇〇〇	二三四,〇〇〇,〇〇〇	二三五,五〇〇,〇〇〇	二六五,〇〇〇	二六五,〇〇〇	二六五,〇〇〇	二六五,〇〇〇	二六五,〇〇〇	二六五,〇〇〇
四〇,〇〇〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇,〇〇〇	四八,〇〇〇,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇
二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇	二〇〇,二六五,〇〇〇

小計	外賓費	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計	小計
贈答金	贈答物品費	接待費	饗宴費	食饌費	修營費	用度雜費	車馬具費	購馬費	飼養費
四六四,〇〇〇,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一,七,五八〇,〇〇〇	六,五〇〇,〇〇〇	一七,五七七,二三三
一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇	一,七六五,〇〇〇
△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇	△三,五〇〇,〇〇〇
四四〇,八六五,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,五〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	一,七〇〇,〇〇〇	一七,五八〇,〇〇〇	六,五〇〇,〇〇〇	一七,五七七,二三三

通計		事業資	
小計	廳舎費	小計	概算
營繕費	一〇、一八三、〇〇〇	東京博物館資	四八、〇〇〇、〇〇〇
庭園費	一三、二五〇、〇〇〇	華族女學校資	二六、〇〇〇、〇〇〇
官舎營繕費	一、二九〇、〇〇〇	學習院資	二九、〇〇〇、〇〇〇
官舎庭園費	四、八六〇、〇〇〇	小計	二九、〇〇〇、〇〇〇
官舎費	一、〇五〇、〇〇〇	小計	二六、〇〇〇、〇〇〇
雇費	八、三〇〇、〇〇〇	諸賦金	六、二五〇、〇〇〇
諸賦金	六、二五〇、〇〇〇	小計	三三、〇〇〇、〇〇〇
小計	一四九、〇〇〇	總計	一四九、〇〇〇
總計	△一五、〇〇〇	總計	一四九、〇〇〇
	一〇、一八三、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	一三、二五〇、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	一、二九〇、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	四、八六〇、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	一、〇五〇、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	八、三〇〇、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	六、二五〇、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	三三、〇〇〇、〇〇〇		一四九、〇〇〇
	一四九、〇〇〇		一四九、〇〇〇

通計	小計
京都博物館資	一三、〇〇〇、〇〇〇
奈良博物館資	一〇、〇〇〇、〇〇〇
小計	七〇、〇〇〇、〇〇〇
總計	一三五、〇〇〇、〇〇〇
二、一八七、〇〇〇、〇〇〇	二、一八七、〇〇〇、〇〇〇
二、四八、九三、四八〇	二、四八、九三、四八〇
△二、五四、三四〇、四三〇	△二、五四、三四〇、四三〇
二、一八一、五八二、〇六〇	二、一八一、五八二、〇六〇

二十六年年度歳出豫算概要説明

廿六年度ニ於テ實際ニ要スベキ見込ノ經常費豫算額ハ、二百九萬八千四百四十六圓十三錢五厘ナリ。之ヲ更定ノ根基定額總計二百十八萬五千五百八十二圓六錢ニ對比スレバ、九萬七百三十五圓九十二錢五厘ヲ減ジ、又前年度ノ豫算額總計二百八萬四千二百五十八圓九十二錢（比較説明書ニ二百八萬四千八百八十八圓九十二錢トアルハ、末尾ニ掲ゲタル太田町御獵場費減額ヲ除キタルル故ナリ）ニ對比スレバ、六千五百八十七圓二十一錢五厘ヲ増加ス。（比較説明書ニ増額六千六百五十七圓二十一錢五厘トアルハ前註ニアル七十圓ヲ除キタル爲メノ結果ナリ）。蓋シ根基定額ニ對シテ減ズルハ實際ノ經費未ダ其見込極度ニ達セザルト、又勉メテ節略シテ豫算ヲ立タルニ因ルモノナリ。但シ其減額ハ成規ニ依リ第一豫備金ニ立置キ、實際豫算以外ニ常費ノ増加ヲ要スルコトアルトキ、根基定額範圍内ノモノハ追増支出スルヲ得ル例ナレバ、決算ニ至ラザレバ其ノ減數ヲ見ル能ハザルナリ。又前年度ニ對シ増加スルハ、畢竟制度施政ノ變遷ト事物ノ消長

ニ由ルモノニシテ、茲ニ其増減金額ヲ舉グレバ、増額ハ二十三萬八千三十八圓五十八錢五厘、減額ハ二十三萬八千三百一十一圓三十七錢ナリ。然ルニ此増減中各十九萬六千六百一十二圓ハ經費ノ出所訂正組替ノ出入ナレバ之ヲ除算シ、全ク事實ニ伴フ所ノ増減ヲ舉グレバ、其増額ハ四萬千四百二十六圓五十八錢五厘、減額ハ三萬四千八百三十九圓三十七錢ナリ。又更ニ此増減ヲ各款ニ就キ内譯ヲ舉レバ、第一款神事費ニ於テ新加ノ官幣中社吉野宮幣饌料及ビ陵墓費實際ノ經費等増加ヲ要スル爲メ七百三十圓ヲ増シ（外ニ組替ノ出入各八十圓アリ）。第二款宮廷内費ニ於テ京都御所御物保存ノ常備二百五十一圓ヲ増シ（比較説明書ニ減額二萬三千七百三十五圓トアルハ組替ノ増千五百十五圓、組替ノ減三萬五千五百圓アリテ之ヲ差引シタルモノナリ）。第三款宮廷外費ニ於テ新設蒲谷御獵場常費並ニ各御獵場内町村手當ヲ加ヘタル爲メ四千五百五十圓ヲ増シタルモ、太田町御獵場ヲ御料部管轄ニ組替タル爲メ七十圓ヲ減ジ、又各御獵場費寶器圖書費等ニテ實況ニ由リ減ズルモノ三百七十一圓アルヲ以テ、差引三千七百九圓ヲ増シ（比較説明書ニ増額三千七百七十九圓トアルハ太田町御獵場費減額七十圓ヲ末尾ニ掲ゲ、茲ニ差引セルニ由ル）。第四款宮殿費ニ於テ京都御所へ電燈設置ノ爲メ常費七百八十三圓六十錢ヲ増シ、又土木費ニテ實際増加ヲ要スルモノ千八百七十圓アルヲ以テ合計二千六百五十三圓六十錢ヲ増シ、第五款皇族家費ニ於テ久邇宮並ニ邦憲王へ特別常給六千五百圓ヲ増シタルモ、久邇宮御賄料定

額一萬五千圓ヲ減シタルヲ以テ差引八千五百圓ヲ減ズ。第六款恩賜ニ於テ追々賜與増加ノ見込ヲ以テ一萬六千圓ヲ増シ（比較説明書ニ減額四萬圓トアルハ組替ノ増十九萬四百圓、組替ノ減十六萬六千四百圓アリテ之ヲ差引シタルモノナリ）。第七款給與費ニ於テ俸給率改正又ハ官職増置、増員、増俸等ノ爲メ、及ビ手當、賄費、恩給、扶助料等實際増加ヲ要スル爲メ、八千二百六十九圓五十三錢ヲ増シ、又俸給率改正廢官減員等ノ爲メ一萬九千三百九十八圓三十七錢ヲ減ズ、差引一萬千二百二十八圓八十四錢ヲ減ズ（比較説明書ニ減額一萬千六百四十四圓八十四錢トアルハ組替ノ増四千六百十八圓、組替ノ減四千五百五十四圓アリテ之ヲ差引シタルモノナリ）。第八款應用費ニ於テ廳舍費ノ實況ニ由リ九十三圓、土木費ノ實況ニ由リ四百二十九圓四十五錢五厘、合計五百二十二圓四十五錢五厘ヲ増シ（比較説明書ニ増額四百四十四圓四十五錢五厘トアルハ、組替ノ減七十八圓アリテ之ヲ差引シタルモノナリ）。第九款事業資ニ於テ京都、奈良兩博物館建築ニ着手シタル爲メ、常費二千三百五十圓ヲ増シタリ。

右ノ外、額外臨時費ノ豫算額ヲ二十六萬六千五百二十三圓四十二錢トシ、皇族家財產準備ノ爲メ御資部ニ移入豫算額ヲ四十二萬圓トス。（前年度ノ移入豫算ハ四十萬圓ナリシガ、臨時下賜金アリシ爲メ十萬圓ヲ減ジ、三十萬圓トナリタリ。之ト對比スルトキハ十二萬圓ヲ増スコトトナレリ）。又臨時ニ生出スベキ經費ニ充テタル第一豫備金九萬七百三十五圓九十二錢五厘アリ、

第二豫備金十五萬九千四百四十四圓三十七錢七厘アリ、總計三百二萬七千二百四十九圓八十五錢七厘ヲ以テ廿六年度ノ歳出豫算成立シタルナリ。

歳費根基金定額増減概要説明

廿六年度已降固定額概定額ノ増減ヲ要スルハ制度施政ノ變遷、事物ノ消長ニ依ルモノナリ。茲ニ其増減金額ヲ舉グレバ、増額ハ二十四萬八千九百二十二圓四十八錢ニシテ、減額ハ二十五萬四千三百四十圓四十二錢ナリ。然ルニ此増減中各十九萬六千六百七十八圓ハ經費ノ出所訂正組替ノ出入ナレバ、之ヲ除算シテ全ク事實ニ伴フ所ノ増減ヲ舉グレバ、其増額五萬二千二百四十四圓四十八錢ニシテ、減額五萬七千六百六十二圓四十二錢ナリ。又更ニ此増減ヲ各款ニ就キ内譯ヲ舉グレバ、第二款宮廷内費ニ於テ京都御所御物保存ノ常費ヲ要スル爲ニ二百五十一圓ヲ増シ、第三款宮廷外費ニ於テ新設ノ涌谷御獵場常費並ニ各御獵場内町村手當常給ノ爲ニ四千五百圓ヲ増シ、太田町御獵場ヲ御料部管轄ニ組替タル爲ニ八十圓ヲ減ズ。第四款宮殿費ニ於テ京都御所へ電燈設置ノ爲ニ七百八十三圓六十錢ヲ増シ、第五款皇族家費ニ於テ久邇宮並ニ邦憲王へ特別年給ヲ定メラレタル爲ニ六千五百圓ヲ増シ、久邇宮御資格變更ノ爲ニ御賄料一萬五千

圓ヲ減ズ。第六款恩賜ニ於テ追々賜與増加ノ見込ヲ以テ一萬六千圓ヲ増シ、第七款給與費ニ於テ俸給變改正又ハ官職増置算率訂正及ビ手當、賄費増加ヲ要スル爲ニ二萬四千三百六十圓八十八錢ヲ増シ、俸給率改正又ハ官職廢止減員、算率訂正等ノ爲ニ四萬二千五百九圓四十二錢ヲ減ズ。第八款廳用費ニ於テ官職増置ニ伴フ經費百九十九圓ヲ増シ、官職減員ニ伴フ經費七十三圓ヲ減ズ。是等ノ増減ヲ乗除スルトキハ、則チ更正ノ定額總計ハ二百十八萬五千五百五十二圓六錢トナルナリ。之ヲ既定ノ定額總計二百十八萬七千圓ニ對比スレバ、五千四百七十七圓九十四錢ヲ減ジタリ。但シ更定ノ増額中ニハ從前定額外ノ歳出ニ立來リシ御獵場内町村手當三千八百七十圓ヲ更ニ組入レタルアリ、此分ハ經常費定額ニ於テハ増加ナルモ、皇室ノ總歳出ニ於テハ増加ト謂フベカラザレバ、之ヲ除算シテ見ルトキハ實ハ九千二百八十七圓九十四錢ノ減額トナルベキナリ。

右ノ更正定額ニ由テ皇室常備ノ大要ヲ舉グレバ、第一款神事費ノ定額ハ四萬六千五百圓ニシテ、是レ則チ賢所ヲ始メ諸神社、諸陵墓ノ祭費及ビ諸陵墓維持ノ要費ナリ。第二款宮廷内費ノ定額ハ四十四萬八千六百六十五圓ニシテ、是レ則チ聖上、皇后兩陛下、東宮御直宮等ノ供御賜饌、御服、御用度、内賜、醫藥等宮室ノ御内政ニ屬スル要費ナリ。第三款宮廷外費ノ定額ハ十三萬七千八百三十圓ニシテ、是レ則チ外交禮式音樂其他皇室御體面ヲ保持スル所ノ宮室御外政

ニ屬スル要費ナリ。第四款宮殿費ノ定額ハ十二萬五千七百八十三圓六十錢ニシテ、是レ則チ宮殿、離宮、御用邸等ノ維持、裝設、營繕ニ係ル經費、是レ又皇室御體面ヲ保持スル所ノ要費ナリ。蓋シ第一款ヨリ第四款ニ至ル經費ハ皇室費中ノ皇室費ト謂フベキモノニシテ、其定額合計七十五萬九百七十八圓六十錢トナルナリ。第五款皇族家費ノ定額ハ二十三萬三千七百圓ニシテ是レ則チ一家ヲ立ラレタル所ノ各宮家ヲ保持シ又ハ其祭祀ヲ繼ガシメラル、所ノ經費ナリ。第六款恩賜ノ定額ハ二十六萬千八百二十圓ニシテ、是レ則チ仁愛ノ聖意ヲ充シムル所ノ恩惠ニ係ル經費ナリ。第七款給與費ノ定額ハ六十六萬四千八百五十二圓四十六錢ニシテ、是レ則チ皇室内外ノ政務ヲ執行スル百官卑夫ニ至ルマデノ諸給與費ナリ。第八款應用費ノ定額ハ十四萬五千二百三十一圓ニシテ、是レ則チ皇室内外ノ政務ヲ執行スル官衙舍宅等ニ要スル百般ノ經費ナリ。蓋シ第七款、第八款ハ宮内省ノ政務費ト謂フベキモノニシテ、其定額合計八十一萬八十三圓四十六錢トナルナリ。第九款事業費ノ定額ハ十二萬五千圓ニシテ、是レ則チ教育獎勵等國家ノ爲メ特ニ設ケラル、所ノ事業經營ノ經費ナリ。此ノ九款ノ總計二百十八萬千五百八十二圓六錢ハ則チ皇室經濟ニ於テ經常歲出ノ根基定額ナリ。

二十六年 度

常用部歲入歲出豫算比較説明書

内 藏 寮

歲入之部 (△印ハ朱書)

款	項	目	本年度豫算	前年度豫算	本年度ノ分	増減事由
經常收入	國庫常額	同上	三,〇〇〇,〇〇〇・〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇・〇〇〇	—	
合計	貸下返入	無利返入	三,〇〇〇,〇〇〇・〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇・〇〇〇	—	
額外收入	貸下返入	無利返入	六,三五六・五〇	七,三三六・五〇	△一,〇七〇・〇〇〇	前年度ニ對シ返納額ノ爲メ六百圓返納額改メ六百圓返納額ニシテ及ビ前年ノ二百五十圓減ズ
貸下返入	貸下返入	無利返入	六,三五六・五〇	七,三三六・五〇	△一,〇七〇・〇〇〇	前年度ニ對シ返納額ノ爲メ六百圓返納額改メ六百圓返納額ニシテ及ビ前年ノ二百五十圓減ズ

歳出之部 (△印ハ朱書)

款	項	目	本年度豫算	前年度豫算 (概)定額	前年度ニ比シ 増減ノ分 本年額ニ對シ 増減ノ分	増減事由	
神事費 祭典費		賢所皇靈神殿 諸祭費	五、七九〇・〇〇〇	五、七九〇・〇〇〇			
		例祭費	一〇五・〇〇〇	一〇五・〇〇〇			
		神宮祭費	二、九六二・〇〇〇	二、九六二・〇〇〇			
		賀茂祭費	八七五・〇〇〇	八七五・〇〇〇			
		男山祭費	六五〇・〇〇〇	六五〇・〇〇〇			
		氷川祭費	八・〇〇〇	八・〇〇〇			
		春日祭費	五、四四〇・〇〇〇	五、四四〇・〇〇〇			

通計	通計	陵墓費	官幣社祭費	陵墓祭費	陵墓祭費	國幣社祭費	陵墓諸費	陵墓取調費	通計
三、九八一・〇〇〇	一、一三六・〇〇〇	三、九四三・〇〇〇	三、九四三・〇〇〇	三、三〇〇・〇〇〇	一、一三六・〇〇〇	一、一三六・〇〇〇	二九、三二七・〇〇〇	四九四・〇〇〇	二九、三二七・〇〇〇
三、〇〇〇・〇〇〇	一、一三六・〇〇〇	三、〇〇〇・〇〇〇	三、〇〇〇・〇〇〇	三、〇〇〇・〇〇〇	一、一三六・〇〇〇	一、一三六・〇〇〇	二八、六五三・〇〇〇	四九四・〇〇〇	二八、六五三・〇〇〇
△一、九一〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇	△一、〇〇〇・〇〇〇
依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ	依リ本文ノ對シ減ズ

合計		宮廷外費		外賓外		通計		醫藥費		通計		富美宮		御養育料	
宴會費	通計	食饌費	饗宴費	接待費	贈答物品費	贈答金	通計	醫藥費	醫藥費	通計	富美宮	御養育料	御養育料	御養育料	御養育料
二,一五八,〇〇〇	一五,〇〇〇,〇〇〇	二,一五八,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇	四四〇,八五七,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇	四八,〇〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇	二,〇〇〇,〇〇〇
一一,五八〇,〇〇〇	一五,〇〇〇,〇〇〇	一一,五八〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇	五〇〇,〇〇〇	四六四,五九二,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇	四八,〇〇〇,〇〇〇	一一,〇〇〇,〇〇〇	一一,〇〇〇,〇〇〇	一一,〇〇〇,〇〇〇	一一,〇〇〇,〇〇〇	一一,〇〇〇,〇〇〇
							△三,七三五,〇〇〇								
							△八,〇〇〇,〇〇〇								

通計		御廐費		通計		狩獵費		通計	
修營費	用度雜費	車馬具費	購馬費	飼養費	諸給費	諸用度費	習志野	連光寺	御獵場費
二,〇〇〇,〇〇〇	一,三〇〇,〇〇〇	一七,五八〇,〇〇〇	六五〇,〇〇〇	一七,五七七,三三三	二,三七一,〇三〇	七,四三一,七四八	二,〇二六,〇〇〇	八八九,〇〇〇	八八九,〇〇〇
二,〇〇〇,〇〇〇	一,三〇〇,〇〇〇	一七,五八〇,〇〇〇	六五〇,〇〇〇	一七,五七七,三三三	二,三七一,〇三〇	七,四三一,七四八	二,〇二六,〇〇〇	八八九,〇〇〇	八八九,〇〇〇
	△四〇〇,〇〇〇						△六,〇〇〇		△一一,〇〇〇
							△八一,〇〇〇		

概定額ニ對シ實況ニ依リ本文ノ如ク減ズ

前年度ニ對シ手當ニテ本文ノ如ク増スニ依リ本文ノ對シ實況ニ依リ本文ノ對シ減ズ

固定額ニ對シ實況ニ依リ本文ノ對シ減ズ

給與費俸給		高等官俸給	判任官俸給	等外吏俸給	功特別俸給
		二四九,三二〇,〇〇〇	一四九,五三二,〇〇〇	四五,〇三六,〇〇〇	一一〇,〇〇〇
		二六七,三九〇,〇〇〇 △一八,〇八〇,〇〇〇	一四六,五二〇,〇〇〇 △三,〇一三,〇〇〇	四五,六二四,〇〇〇 △五八八,〇〇〇	一,六一〇,〇〇〇 △一,一〇〇,〇〇〇
		二七〇,八〇〇,〇〇〇 △二,四九〇,〇〇〇	一五七,四九六,〇〇〇 △七,九六四,〇〇〇	四五,八三四,〇〇〇 △七九八,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇 △一,七九〇,〇〇〇
		前年度ニ對シ官制俸給額改正及廢官等ニ依リ本文ノ如ク減ズ	前年度ニ對シ廢官減員等ノ爲メ亦一、千六百二十圓ヲ爲メ減ズトモ百三十二圓ヲ増セシク引本増ス	前年度ニ對シ増俸ノ爲メ百六十八圓ヲ増スモ百七十八圓ヲ減ズトモ七十五圓ヲ減ズトモ引本ノ如ク減ズ	前年度ニ對シ減員ノ爲メ五百圓ヲ減ズトモ増俸ノ爲メ九十圓ヲ増セシク減ズ

通計		主殿寮京都出張所俸給	雜役雇給料	小者給料	主殿寮京都出張所給料
給料計		一三,八八八,〇〇〇	二二,四六〇,七五〇	二二,〇四九,九〇〇	一,三四〇,三五〇
		七,八八四,〇〇〇 一三,六一二,〇〇〇	四六九,〇三八,〇〇〇 四九〇,七四二,〇〇〇	二一,三〇三,三八〇 二二,八三二,三三〇	一,六二八,六四〇 二,〇四四,九三〇
		五,〇〇四,〇〇〇 △七三四,〇〇〇	△一一,〇六二,〇〇〇 △三,七六六,〇〇〇	△一五六,四八〇 △七七六,三三〇	△二八八,三九〇 △七〇四,六八〇
		前年度ニ對シ昇級増員及手當ヨリ組替等ノ爲メ高等官俸給其トモ五千三百八圓ヲ増スモ諸缺員轉任等ノ爲メ諸缺員轉任官俸給其他ニ依リ四圓ヲ減ズルニ依リ引本ノ如ク減ズ	前年度ニ對シ増給アリシニ依リ本文ノ如ク増ス	前年度ニ對シ減員減給等ノ爲メ本文ノ如ク減ズ	前年度ニ對シ増給ノ爲メ小者給料ニ對シテ十圓メ給料ヲ増スモ雜役雇給料其他ニ依リ百二十九圓ヲ減ズ

小計	皇后宮費	小計	皇太后宮費	小計	京都御所 御物保存費	贈賜金	贈賜物品費	御服用費	御用度費	庖厨費
六七,〇〇〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇,〇〇〇	七〇,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	六七,〇〇〇,〇〇〇	二六五,〇〇〇	四〇,〇〇〇,〇〇〇	八,二〇〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇,〇〇〇	三七,〇〇〇,〇〇〇	一八,三九二,〇〇〇
	皇后宮費		皇太后宮費		御物修費百圓 手當百十五圓 一時雇費三十圓 雜費十五圓	內贈金五千圓 內賜金三萬五千圓	贈進物品費二千七百圓 賜與物品費五千五百圓	御冠服費千圓 御正服費二千圓 御常服費一萬四千圓 御寢用具費三千圓	什具費一萬三千五百圓 文房費千七百圓 書箱費二千七百圓 消耗費九千三百三十圓 一時雇費二千七百五十圓 雜費百圓	飲食器費一萬千七百圓 厨具費二千三百七十圓 雜具費八百二十三圓 雜費三千九百九十圓

東宮費	小計	御直宮費	小計	醫藥費	小計	外賓費	通計	宮廷外費	小計	宴會費
東宮費	常宮周宮 御養育料	富美宮御養育料	醫藥費	贈答金	贈答物品費	接待費	四四〇,八五七,〇〇〇	贈答金	一五,〇〇〇,〇〇〇	食價費
五〇,〇〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇,〇〇〇	一三,〇〇〇,〇〇〇	四八,〇〇〇,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇	五,六〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇	五〇,〇〇〇	贈答物品費	二,五〇〇,〇〇〇	二,五〇〇,〇〇〇
東宮費	常宮周宮御養育料	富美宮御養育料		治療具費千五百圓 藥品費三千四百圓 雜具費三百七十圓 雜費三百三十圓	贈答金	贈答物品費		贈答物品費	二,五〇〇,〇〇〇	新年宴會費二千六百四十圓 紀元節宴會費二千五百九十七圓 天長節宴會費三千四百十三圓 觀櫻會費千六百圓 觀菊會費千六百圓

御廐費	小計	修營費	用度雜費	車馬具費	購馬費	飼養費	諸給費	諸用度費	習志野御獵場費	連光寺御獵場費
二,〇〇〇.〇〇〇	一,三〇〇.〇〇〇	一四,八八〇.〇〇〇	一七,五八〇.〇〇〇	六五〇.〇〇〇	一七,五七七.三三二	三,七一一.〇二〇	七,四三一.七六四	七,一八〇.〇〇〇	二,〇二六.〇〇〇	八八九.〇〇〇
觀櫻會費六百圓 觀菊會費千四百圓	新年宴會費百五十圓 紀元節宴會費百五十圓 天長節宴會費二百圓 觀櫻會費四百圓 觀菊會費四百圓	馬車具費一萬五千六百圓 乘馬具費千五百八十圓 雜具費四百圓	購馬代五千九百圓 牽付費六百圓	飼養費 小者定雇費一萬九千四百五十三圓 八十錢 小者一時雇費二十四圓 小者被服費三千二百三十三圓 二十二錢	器具費二千八百一十一圓 五十四錢 六厘 蹄鐵費三千八百三十二圓 二十錢 二厘 雜費三百圓	給料五百六十九圓 一時雇費百五十圓 旅費七圓 運搬費百六十九圓 器具費十圓 被服費九十二圓 十二圓 營繕費三十五圓 雜費五十五圓	給料二百六十九圓 一時雇費百二十圓 旅費七圓 運搬費八十八圓 器具費四十三圓 被服費八圓 雜費五十一圓 營繕費二十圓 雜費四十四圓	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料九百二十八圓 一時雇費六百四十四圓 旅費七圓 運搬費八百九十五圓 器具費七十四圓 被服費二百十八圓 雜費七十五圓 營繕費二百四十四圓 雜費九十二圓

御廐費	小計	修營費	用度雜費	車馬具費	購馬費	飼養費	諸給費	諸用度費	習志野御獵場費	連光寺御獵場費
二,〇〇〇.〇〇〇	一,三〇〇.〇〇〇	一四,八八〇.〇〇〇	一七,五八〇.〇〇〇	六五〇.〇〇〇	一七,五七七.三三二	三,七一一.〇二〇	七,四三一.七六四	七,一八〇.〇〇〇	二,〇二六.〇〇〇	八八九.〇〇〇
給料九百二十八圓 一時雇費六百四十四圓 旅費七圓 運搬費八百九十五圓 器具費七十四圓 被服費二百十八圓 雜費七十五圓 營繕費二百四十四圓 雜費九十二圓	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢	給料二百八十五圓 一時雇費二百九十九圓 旅費七圓 運搬費八十二圓 器具費七圓 被服費四圓 雜費十九圓 營繕費八十錢

支出總計	華族女學校資	同上	二六、〇〇〇・〇〇〇	華族女學校資
	小計		二六、〇〇〇・〇〇〇	
	博物館資	東京博物館資	四八、〇〇〇・〇〇〇	博物館資
		京都博物館資	三、二五〇・〇〇〇	京都博物館資
		奈良博物館資	二、六五〇・〇〇〇	奈良博物館資
	小計		五三、九〇〇・〇〇〇	
			一〇八、九〇〇・〇〇〇	
通計			二、〇九〇、八四六・一三五	
合計	御資部ニ移入	二十六年 御資部ニ移入	四二〇、〇〇〇・〇〇〇	
	臨時費		一〇〇、九〇〇・四一七	
	第一豫備金		二五六、四三三・〇〇三	
	第二豫備金		九〇、七三五・九三五	
			一五九、一四四・三七七	
支出總計			三、〇二七、二四九・八五七	

有栖川宮家

十九年歲計決算報告

當宮明治十九年度歲計決算ハ會計年度ニ從ヒ十九年四月一日ヨリ二十年三月三十一日マデヲ以テ計算ヲ了シ、茲ニ報告書ヲ作ルニ當リ一二ノ事ヲ左ニ提記ス。

- 一、從來一品宮御經費ト三品宮御經費トヲ區別シ計算ヲ爲セシモ、素ト是レ御同居ノ經濟ニ付一々區別スベカラザルモノアルヲ以テ或ハ假設タルヲ免レズ、故ニ本年度ハ兩宮ノ御經費ヲ合併シテ收支ヲナセリ。
- 一、當宮ノ會計ハ從來ノ習慣アリテ俄ニ會計法出納條規ニ據リ之ヲ改正セントスレバ、職員ノ不熟ハ勿論又多少手數ヲ費シ隨テ職ノ増加ヲ要スル場合アリテ急ニ行ナハレ難キヲ以テ、假リニ別冊會計規則ヲ定メタレバ參考ノ爲メ之ヲ添附ス。
- 一、本年度ニ於テ兩宮御息所ノ御服制ヲ歐裝ニ改メサセラレタルト、續宮ノ御凶變トハ全ク豫

算外ニ生ジタル事柄ニテ、爲メニ多額ノ出費ヲ要シタルヲ以テ内藏寮ヘモ協議ノ上、公債證書五千圓買上ゲテ請求シ、一時貯蓄量ヨリ生ズル利息ヲ以テ其不足ヲ補ヒタリ。然レドモ其金額ハ追テ二十年度定額内ヲ以テ補填セントスルモノナリ。

一、三品宮御息所ノ御禮服ヲ歐洲ヘ注文ニ付テハ一萬圓ノ多額ヲ要シ、内五千圓ハ皇后宮ヨリ御下賜アリタルモ、其殘額五千圓ハ兩宮ノ御經費ヲ合併セシテ以テ全ク流通支出ヲ了スルコトヲ得タリ。

一、本年度ニ於テ當宮貯蓄金ニ屬シタルモノハ、日本鐵道會社株券六百株、並ニ五分利付公債證書八千五百九十圓ナリ、右株券ハ前キニ故一品宮御隱邸ヲ建築局ニ賣却シタル代金三萬圓ヲ以テ内藏寮ヨリ讓受ケテ爲シタルモノニシテ、公債證書ハ十九年度定額内ヲ以テ内藏寮ヨリ買戻シタル額面一萬三千五百九十圓ノ内又五千圓ヲ内藏寮ニ買上ゲラレタルノ殘額ナリトス。

一、御資産取扱上從來區々ニシテ一定ナラズト雖モ、本年度以降ハ御資産ニ屬スルモノ、即チ公債證書、株券、地券等ハ勿論、御印并ニ別當官印其御手許ニ藏置シ、其利札切取り、或ハ他ニ必要ノ事アルトキ時々裁可ヲ得テ之レガ取扱ヲ爲シ、苟クモ其裁可ヲ得ルニアラザレバ、別當以下令扶ニ於テ取扱ヲ爲スコトヲ得ザルモノナリ。

右謹デ具申ス。

明治二十年七月

有栖川宮別當 子爵 山 尾 庸 三

宮内大臣 伯爵 伊 藤 博文 殿

有栖川宮十九年度歳入出決算報告書

歳入之部

十八年度越金	金一千八百四十圓九十五錢九厘	
御定額金	金四萬圓	御定額金三萬圓也三品宮御定額金一萬圓ヲ云フ。
十九年八月 臨時御下賜金	金一萬圓	兩御息所歐裝御禮服出來ニ付 皇后宮ヨリ思召ヲ以テ被下金

十九年六月十二月 御下賜金	金五千圓	一品宮へ六、十二兩月特別賜 金ヲ云フ
故一品宮十九年五月 百日御祭典御下賜金	金二千五百九十六圓十五錢	故一品宮百日祭ニ付宮内省ヨ リ御支出金ヲ云フ
雜收金	金三百三十五圓二十六錢五厘	十九年中雜品類拂下金ヲ云フ
廿年一月京都御參向 御旅費御支度料概算	金二百三圓三十五錢	一品宮京都行幸供奉ニ付賜金 ヲ云フ
鐵道公債十九年 下半年分利益金	金一千三百五十圓	御所有鐵道公債證書額面三萬 圓ノ利子ヲ云フ
御賞典御公債 十九年十一月分利子	金二百十四圓七十五錢	御所有公債證書五分利八千五 百九十圓ノ利子ヲ云フ
十九年八月 御公債御賣却金	金五千圓	十九年八月兩御息所御禮服歐 洲御注文之筋内藏寮へ御買上 御願ニ付御下金ヲ云フ
合計	金六萬六千五百四十七錢四厘	

歲出之部

御手許許費	金一千五百圓	御手許一切ノ費用ヲ云フ
-------	--------	-------------

御手許御交際費	金一千六百八十圓	御手許御交際一切ノ費用ヲ云 フ
定例被進被下費	金七百五十七圓五十錢	定例御進物寄贈金賞品料等ヲ 云フ
臨時被進被下費	金千八百三十八圓七十八錢九厘	臨時献上歡餞別見舞備物寄賜 金土産等ヲ云フ
御賄費	金二千八百八十五圓二十三錢	御膳米魚鳥肉類青乾物菓物酒 油洋食品等ヲ云フ
御衣服費	金六千六十二圓三十一錢	御衣服一切ノ費用ヲ云フ
御厩費	金七百十三圓九十二錢六厘	御馬九頭分飼料並ニ馬車馬具 繕ヒ費及ビ都テ諸雜品買上ゲ ヲ云フ
平常接待費	金千三百五十三圓〇四錢	御平常御客來年始其他御親族 等御招請諸入費ヲ云フ
消耗費	金千三百二十九圓十四錢	瓦斯薪炭石炭水油蠟燭都テ失 却品ヲ云フ
營繕費	金千三百三十九圓六十錢四厘	平常敷物障子窓押入簷樋壁等 繕ヒ費ヲ云フ
臨時營繕費	金百四十三圓二十七錢	新規諸修葺費ヲ云フ
物品破損費	金九十九圓七十一錢一厘	諸物品破損繕ヒ並ニ御洋食ナ フキン皿敷ノ洗濯費ヲ云フ
賦金	金百十圓二十錢二厘	上水費撒水除雪費ヲ云フ

新規器物費	金千六十六圓二十四錢七厘	提灯本机書狀函ランプ燭臺火鉢等諸品新規買上費ヲ云フ
旅費	金二百七十五圓三十錢八厘	都テ旅行ニ關スル諸費ヲ云フ
藥價	金五十四圓二十五錢	都テ御藥味御買上ゲ費ヲ云フ
新聞買上費	金二十三圓二十八錢五厘	官報新聞等御買上費ヲ云フ
拜診費	金百六十八圓六十五錢	拜診醫師御會釋ヲ云フ
二季被進被下費	金三百二十三圓七十五錢四厘	二季諸向へ被進被下費ヲ云フ
接待費	金九百二十六圓三十九錢	内外國人別段御交際御饗應入費ヲ云フ
故一品宮御祭典費	金三千百八十九圓〇七錢九厘	十九年一月御葬儀後百日祭迄ノ惣御入費ヲ云フ
故宜子女王廿年祭典	金百四十四圓四十一錢九厘	十九年十一月故詔仁親王妃妙勝定隱宮廿年祭京都並ニ御本邸等ニテ御執行費ヲ云フ
故綾子女王御葬儀費	金千六百二十九圓〇六錢三厘	十九年十月御葬儀並ニ御祭典其他該諸費ヲ云フ
御隱邸殘拂	金三百六十二圓八十六錢四厘	十八年度殘拂ヲ云フ
御別邸費	金百十七圓七十七錢四厘	御別邸諸費ヲ云フ
一品宮京都御參向費	金千六百七十五圓七十三錢一厘	十九年一月京都行幸啓御供奉御參向入費ヲ云フ

三品宮並ニ御息所御入浴費	金九百圓	十九年七月ヨリ九月迄伊香保日光御入浴費ヲ云フ
兩御息所御禮服費	金二萬七百萬圓	十九年八月歐洲へ御注文惣御入費ヲ云フ
宮内省返納金	金五千二百九圓五十錢	去十八年九月御負債消却ノ節公債證書爲抵當内藏寮へ御預分御買戻金ヲ云フ
應中費	金百二十二圓三十三錢九厘	筆硯墨紙熨斗水引郵便都テ應中ニ關スル諸費ヲ云フ
被服費	金六百十五圓八十八錢二厘	侍女洋服並ニ家扶從小者馬丁等ノ被服ニ關スル費用ヲ云フ
雜給	金七百八十圓八十三錢七厘	植木職人力車雇及諸雇等ノ諸費ヲ云フ
給與	金七百二十三圓八十七錢	諸給與ヲ云フ
月給	金六千二百二十二圓七十五錢	家扶以下男女末々迄給料
十八年殘拂金	金千三百十五圓八十七錢四厘	御本邸十八年度三月分仕拂金ヲ云フ
合計	金六萬五千六百五十圓六十八錢八厘	
差引殘金	金八百八十九圓七十八錢六厘	

有栖川宮家會計規則

第一章 總 則

- 第一條 會計ハ豫算ニ起リ之ニ據テ出納シ決算ニ結了ス。
- 第二條 會計ハ其年四月一日ニ起リ翌年三月三十一日ニ終ル、之ヲ一週年度トス。
- 第三條 會計ヲ大別シテ常用、豫備ノ二種ト爲シ、別ニ儲蓄ノ一部ヲ設ク。
- 常用トハ經費ニ屬スル費途ヲ云ヒ、豫備トハ常用外臨時ニ屬スル費途ヲ云フ。
- 第四條 會計ハ別當之ヲ總管ス、現金ノ出納ハ會計主任之ヲ營掌シ、其任拂ハ會計主任副ヲシテ之ヲ取扱ハシム。

第二章 會計主任

- 第五條 會計主任ハ家扶ノ内一人ヲ以テ之ニ充テ、會計ニ關スル一切ノ責ニ任ズルモノトス。
- 第六條 會計主任ノ下ニ會計主副二人ヲ置キ、家扶家從ノ内ヨリ之ニ充ツベシ。
- 第七條 會計主任副ノ内一人ハ專ラ金錢出納ノ事ヲ掌リ、一人ハ專ラ物品出納ノ事ヲ掌ルモノトス。
- 第八條 家從家丁ノ内ヨリ書記一人ヲ置キ、專ラ帳簿記載ノ事ヲ掌ラシム。

第三章 經費豫算

- 第九條 各年度ニ屬スル一切ノ經費ハ毎年歲計豫算帳ヲ以テ之ヲ定ム。
- 第十條 會計主任ハ毎年度各月ニ分チタル細豫算ヲ立テ、大科目、小科目ニ區別シ、歲計豫算帳ヲ編製シテ前年度二月末日マデニ之ヲ別當ニ出スベシ。
- 第十一條 別當ハ歲計豫算帳ヲ檢按シ、前年度三月十五日マデニ裁可ヲ經テ之ヲ決定スベシ。
- 第十二條 經費ハ率ネ左ノ區別ニ基キ之ヲ豫算スベシ。
- 經費中令扶以下其他ニ支給スベキモノニシテ豫期スルヲ得ベキモノハ、現人員ニ依リ之ヲ定ム、其豫期スルヲ得ザルモノハ前年度實費ノ平均額ヲ標準トス。

經費中工事ノ類ニシテ豫期スルヲ得ベキモノハ仕譯帳ニ基キ之ガ費額ヲ豫定シ、其數年ニ涉ルモノハ總費額ヲ各年度ニ分賦シ其年度ノ豫算ヲ爲スベシ。

第十三條 會計主任ハ臨時ノ事變又ハ已ムヲ得ザルモノアリテ増額若クハ別途支出ヲ要スルトキハ其金高事由ヲ傳票ニ詳記シ別當ニ差出シ、別當ハ之ヲ檢按シ裁可ヲ經テ決定スベシ。但シ御手許ニ印章三個ヲ藏置ス、其二ヲ可否ノ御裁可ニ被爲用モノトス、其一ハ別當ノ印ニシ、公債、證書、株券並ニ地券、其他御資産ニ係ル證印ニシテ、公債、證書、株券、地券、其外御資産證書ト共ニ御手許ニ藏置ス、故ニ御資産證書等御裁可ヲ經ズシテ變更又ハ移轉スルコトヲ得ザルモノトス。

第十四條 經費中金額ノ流用ヲ要スルコトアルトキハ、大科目ハ別當ノ承認ヲ受クルニアラザレバ流用スルヲ得ズ、小科目ハ會計主任ニ於テ之ヲ流用スルヲ得。

第十五條 經費豫算中豫備費儲蓄部ハ別當特ニ之ヲ主管ス。

第十六條 儲蓄部取扱ノ方法ハ別ニ之ヲ定ム。

第十七條 經費ハ豫算月額割ノ額ニ超過スルヲ得ズ。

第十八條 經費仕拂ハ會計年度ノ末日（毎年三月三十一日）ヲ以テ決了ノ期トス。但シ甲年度ニ屬スル經費ニシテ乙年度ニ於テ其仕拂ヲ要スルモノアルトキハ乙年度ノ經費ニ出スベシ。

第十九條 毎月經費ノ仕拂ハ其月ノ末日ヲ以テ決了スルモノトス、但シ前月ニ屬スル仕拂ニシテ翌月ニ跨ルモノハ其月（翌月）ノ仕拂ニ立ツベシ。

第二十條 經費金額ハ豫算ニ基キ月割ヲ以テ宮内省ヨリ定時ニ會計主任之ヲ領收シ、其金額ヲ現金元帳ニ詳記シ、現金ハ鐵函ニ藏メテ之ヲ管守スベシ。

第二十一條 鐵函ノ鍵ハ會計主任之ヲ管守ス、若シ會計主任事故アルトキハ會計主任副ヲシテ代理セシムルヲ得。

第二十二條 鐵函ハ會計主任會計主任副立合ノ上ニアラザレバ開閉スルコトヲ得ズ。

第二十三條 常用經費ハ總テ現金ヲ以テ之ヲ仕拂フベシ、但シ已ムヲ得ザル事故アリテ通帳ヲ以テ延拂フ爲ストキハ、別當ノ承認ヲ受クベシ。

第二十四條 會計主任ハ其仕拂フベキ現金ヲ受取人ニ交付シ、其證書ヲ徴スベシ。

第二十五條 諸拂ハ毎日午前第十時ヨリ午後二時マデニ限ル、但シ臨時至急ヲ要スルモノハ此限ニアラズ。

第四章 物品出納

第二十六條 物品トハ固有ノ御財産ニ屬スルモノト新ニ調達セシモノトヲ問ハズ不動産及ビ公債證書、動植物ヲ除クノ外之ヲ總稱ス。

第二十七條 物品ヲ分テ三種トス。

第一類 實物類貴重ナル固有ノ物品

第二類 普通用ノ物品

第三類 一時ノ消費ニ供スル物品

第二十八條 物品ハ會計主任之ヲ總管シ、會計主任副ヲシテ之ヲ出納セシム。

第二十九條 會計主任ハ物品帳ヲ製シ、第一類ニ屬スルモノヲ甲帳ト爲シ、第二類ニ屬スルモノヲ乙帳ト爲シ、第三類ニ屬スルモノヲ丙帳ト爲シ、其甲帳ハ二通ヲ製シ、一通ハ御手許ニ備ヘ置キ、一通ハ會計主任之ヲ管ス、乙、丙帳ハ會計主任副常ニ之ヲ管スルモノトス。

第三十條 第一類ニ屬スル物品ハ御命令、第二類ハ會計主任ノ指命アルニ非ザレバ之ヲ出納スルヲ得ズ、第三類ニ屬スルモノノ出納ハ會計主任副直ニ之ヲ執行ス。

第三十一條 會計主任ハ第二類ニ屬スル物品ノ新調若クハ修覆ニ係ルモノ、及ビ損傷、紛失等ノ事アルトキハ之ヲ物品帳ニ附記シ置クベシ。

第三十二條 會計主任副ハ毎月第三類ニ屬スル物品ノ消耗高及ビ其殘品翌月ヘ越高、物品出納

帳ニ詳記シ、翌月五日マデニ會計主任ニ出シ承認ヲ受クベシ。

第三十三條 第一類物品ハ虫干若クハ手入ノ節、第二類物品ハ一年二次會計主任ニ於テ其物品ヲ點檢シ、物品帳ヲ別當及ビ家令ニ差出シ其檢印ヲ受クベシ。

第三十四條 第二類、第三類ノ物品ニシテ不用ニ屬シ之ヲ賣却セントスルトキハ別當ノ承認ヲ受クベシ。

第三十五條 御手許用物品及ビ御手許ニ於テ直ニ出納セラル、モノハ本章ノ外トス。

第五章 決算及報告

第三十六條 會計主任ハ毎月出納ニ關スル諸帳簿ニ之ニ對スル證書ヲ添ヘ翌月五日マデニ之ヲ別當及ビ家令ニ出シ、其承認ヲ受クベシ。

第三十七條 會計主任ハ毎月宮内省ヨリ受取リタル金額ノ報告書ヲ製シ内藏寮ニ差出シ、内藏頭ノ承認ヲ受クベシ。

第三十八條 會計主任ハ毎年經費決算書ヲ製シ翌年度四月十五日マデニ諸帳簿、諸證書ヲ添ヘ別當及ビ家令ニ差出シ、別當ハ之ヲ檢按シ裁可ヲ經テ決了スベシ。

第三十九條 決算上殘餘アルトキハ儲蓄部ニ繰入レ、別當特ニ之ヲ管理ス。

第六章 帳簿

第四十條 帳簿ハ豫算帳、現金元帳、現金受拂帳、經費區別帳、第一類物品帳、第二類物品帳、

第三類物品出納帳、經費月表俸給渡帳、諸注文帳トス。

其他補助簿ヲ要スルモノアルトキハ別當ノ承認ヲ受ケテ之ヲ設クベシ。

第四十一條 月々ノ出納ハ各帳ニ就キ必ラズ其日ニ於テ締上グルモノトス。

第七章 雜則

第四十二條 別當及ビ家令ハ諸帳簿及ビ金錢物品ノ出納ヲ検査シ又ハ隨時金錢物品ノ現存高ヲ臨檢スルコトアルベシ。

第四十三條 會計主任副ニ於テ第二類及ビ第三類ノ物品ヲ調達セントスルトキハ總テ其積リ書ヲ徴シ、價格相當ト認メタル上ハ會計主任ノ檢印ヲ受ケ調達ノ手續ヲ爲スベシ。但シ其第二類ニ屬スル物品ハ特ニ別當ノ承認ヲ受クルモノトス。

各皇族方御歲計調書

(明治十七年十二月二日調)

有栖川二品宮

一金二萬二千五百圓	賄料
一金二千五百圓	賄料增加
一金五千圓	自衛費
一金四千圓	交際費
一金七百圓	每年十二月末ノ御陪食ノ節ノ御手元ヨリ被下
小計金三萬七百圓	

一金七千二百圓	太政官ヨリ	俸給
一金六千圓	同上	交際費
小計金一萬三千二百圓		

合金四萬三千九百圓

有栖川一品宮

一金四千五百圓

一金千五百圓

一金二千圓

合金八千圓

賄料

賄料增加

御親祭ノ御用掛被仰付候ニ付被下

有栖川三品宮

一金四千五百圓

一金五千五百圓

一金八百四十圓

合金一萬八百四十圓

賄料

賄料增加

俸給 但シ海軍大尉一等俸給ノ算出

伏見宮

一金二萬二千五百圓

一金二千五百圓

一金千七百四圓

合金二萬六千七百四圓

賄料

賄料增加

俸給 但シ歩兵中佐近衛俸給

閑院宮

一金二萬二千五百圓

一銀貨四千七百圓

合金二萬七千二百圓

賄料

佛國ノ御留學中年々被下

小松宮

金二萬二千五百圓

一金二千五百圓

一金二千圓

小計金二萬七千圓

一金四千二百圓

合金三萬二千二百圓

賄料

賄料增加

年々被下

俸給

但シ陸軍中將近衛俸給

山階宮

一金一萬八千圓

一銀貨六千五百圓

合金二萬四千五百圓

賄料

英國御留學中年々被下

久邇宮

一金一萬八千圓

一金二千圓

合金二萬圓

賄料

賄料增加

北白川宮

一金一萬八千圓

一金二千圓

小計金二萬圓

一金三千圓

合金二萬三千圓

賄料

賄料增加

俸給

但シ陸軍少將俸給

華頂宮

一金一萬二千圓

賄料

各皇族方御歲計調書

(二)

仁賢天皇 四、三、七、
仁孝天皇 九、
仁明天皇 七、九、二七、
仁徳天皇 七、二六、二〇、
西村茂樹 四七、

(ホ)

ホツ プ 二四〇、
細川潤次郎 四三、
ホフ マン 五三、
ポル テス 五四、

(ヘ)

ヘンリー八世 一一、
ヘル ト 五九、
ヘルワルト 五五、
ヘルツェル 五七、

(ト)

ルードルフ、グナイスト 五〇、
(ル)

(オ・ヲ)

應神天皇 四、三、七、
大中姫命 五〇、九、
億斗王 六、
大津皇子 五、一〇、
大國主命 七、三、
オラニアン 八四、
刑部親王 二二、
大炊王 三六、
小笠原貞孚 四九、
大河内正質 四九、
弟橘姫命 六九、六〇、

(ワ)

和氣清麻呂 四、四、六、八、
ワイセル 五三、

徳川家康 五三、

(子)

仲哀天皇 六、二七、
澄覺法親王 二二、
チャルス第二世 三三、
親子内親王 一七、一六、
チルレル 五四、
チエー、リヒテル 五四、

(リ)

履中天皇 四、四、四、五、六、七、九、
リオネ 二四七、
リオンネ 一一、二四、二四三、三〇一、三〇二、四四、
リユーベック 五三、
リュツツオール 五三、
リーシグ 五四、

(又)

沼間守一 二六、

ワクスムート 五四、
ワグネル 五七、

(カ)

春日大娘 四、四、三、
龜山天皇 五、六、七、九、二二、二九、
桓武天皇 六、九、三六、三四、
龜山院 七、
花山天皇 二八、
河田景興 四九、
楫取素彦 四九、
周宮内親王 六〇、

(ヨ)

嘉子内親王 六、
陽成天皇 二七、
ヨハン、フリードリヒ、ヘルバルト 五四、五五、五七、五一、

(タ)

忠房親王 七、二二、二八、

建御雷神 七、三三、
竹内惟忠 四九五、
檀林皇后 六三、

(レ)

冷泉天皇 五三、四、

(リ)

ソフイア 一〇、
曾我祐準 五八四、

(ツ)

恆明親王 六、一一、
恆直親王 六、一一、
常宮内親王 六〇三、

(ナ)

中御門天皇 五、五、
直仁親王 六、一一、
ナポレオン 二八、三三、五〇九、
那破命三世 三三、三六、三〇、三五、

ウキンテン 五〇四、
ウキンケルマン 五〇四、
ウエー、バイフェル 五〇四、

(ノ)

宣子内親王 一七、

(ク)

葛野王 四、六、
草壁皇子 一〇三、三三、
クロウエル 二七、
久邇宮朝彦親王 三三、四四、
久邇宮多嘉王 四四、
黒田清綱 四三、
グスタフ、フリョーリヒ 五三、
クナウス 五〇四、
邦憲王 六三、

(ヤ)

日本武尊 五、七、二四、六九、

中井弘

四四、四五、四六、四八、四九、四一、四二、
四三、

(ラ)

ラインハルド 五三、
ラ 五七、
ラーペル 五七、
ラ 五七、

(ム)

村上天皇 五、六、

(ウ)

厩戸豊聰耳皇子 一〇三、二六、
ウイリヤム 一〇、
ウエルケル 二四、
ヴイクトリヤ 二七、
ウイードマン 五〇四、
ウエーベル 五〇四、
ウキルチ 五〇四、

安宿媛 九、一六、
柳原前光 二四、一六、一〇一、三九、三一、三二、
三三、三六、三七、三九、四〇、

山階宮晃親王 三六、
山尾庸三 六〇、

(マ)

マインホルド 五〇四、

(ケ)

顯宗天皇 四、四、六、七、一〇、
繼體天皇 四、五、七、九、
元明天皇 二六、三三、
元正天皇 二六、
ゲオルグ第三世 二九、
ケ、ネーゲン 五〇、
ゲルデル 五五、
ケルネル 五七、

(フ)

嵯峨天皇 五、六、一九、二七、
三條天皇 六、七、
齊明天皇 三、

(キ)

清仁親王 七、

北白川宮熊久親王 三、三、三、七、

吉備真備 四、

北小路隨光 四、六、

ギ―セマン 五、七、

(ユ)

幽王 五、一〇三、

湯原王 六、二二、三六、

雄略天皇 六、九、

(メ)

メレイ 一〇〇、

(ミ)

滿仁親王 六、二二、

源定 七、二七、
源融 七、二七、
源是茂 七、二七、
源賴政 一、八、
明正天皇 三、三、三、
壬生基修 四、九、

(シ)

神武天皇 四、四七、五、三、五、四、五、七、九、
九、九、九、九、四、四、四、

神功皇后 四、六、八、一〇一、一〇三、一〇八、一六一、
三、六、六、六〇、六二、

持統天皇 四、三、六、六、九、一〇七、一六一、
五、五、六、六、六、六、六、六、

聖武天皇 五、九、三、三、

舒明天皇 五、九、三、三、

淳仁天皇 五、六、六、七、二七、

淳和天皇 五、七、九、二七、

順德天皇 五、九、

ヒギユルテル 五、五七、

ヒルードウキヒ 五、五七、

ビニツク 五、五八、

久子内親王 五、七〇、

日野資秀 五、七、五八、五八一、

(モ)

文武天皇 五、六、九、二二、一七三、一七四、四三、

物部麻呂 五、九、四、

護良親王 四、三、

(セ)

清寧天皇 四、四、八、三、七、

成務天皇 五、七、二四七、

清仁天皇 一、八、

ゼームス第一世 二、六、七、

ゼーマン 五、三、

(ス)

崇峻天皇 四、二六、

推古天皇 四、六、八、一〇三、一〇六、一三三、一四三、

シユルチエ 一〇三、二四〇、二四三、二六、

島田三郎 二〇、

正元天皇 二六、

稱徳天皇 二六、

シヨルジ一世 二七、

シヨルジ三世 二七、

シユライベル 五、四、五、七、

シユルツ 五、五、

下田歌子 六、一、六、三、六〇、六三、六七、六八、

(ヒ)

東山天皇 五、九、二二、

敏達天皇 二二、

彼得兒 二七、

ビョーッル 三〇、

土方久元 四九、四九、

日野西光善 四九、

ビスマルク 五〇、五〇、

ビユツク 五五、五八、五六一、

ヒケーン 五五、

索引

ス タ ー ケ	スト リ ュー ビ ン グ	ス プ リ ン ゲ ル	管 原 道 真	崇 光 天 皇	垂 仁 天 皇	綾 靖 天 皇
五 六、	五 四、	五 三、	四 七、	二 六、	三、	四、 七、

昭和十一年七月十二日印刷
昭和十一年七月十六日發行

(非賣品)



秘書類纂
卷上・料資度制室帝

製複許不

校訂者	平塚篤
發行者	東京市杉並區西荻窪二ノ六六 平塚篤
印刷者	東京市小石川區柳町二六番地 佐藤磨

發行所

東京市麴町區內幸町一ノ三(大阪ビル内)
秘書類纂刊行會

電話銀座(57)五五八一番
一八九番
振替東京三一六六四番

L110J-43





